

2024年度
授業の自己評価報告書

奥羽大学 歯学部

2024年度 授業の自己評価報告書科目一覧

学年	授 業 科 目	科 目 責 任 者	頁
1～4	エレクトティブスタディー	玉 井 利代子	1
1	情報リテラシー I	古 山 昭	2
1	英語基礎	長 峯 英 樹	3
1	英語 I	長 峯 英 樹	4
1	心理学	佐 藤 步	5
1	経営学	長 峯 英 樹	6
1	日本語学 I	本 多 真 史	7
1	医療倫理学	長 岡 正 博	8
1	基礎物理学	荒 木 威	9
1	基礎化学	斎 藤 昇太郎	10
1	化学実験	阿 部 匡 聡	11
1	基礎生物学	今 井 元	12
1	生物学実験	今 井 元	13
1	歯科医学演習	鈴 木 史 彦	14
1	歯科医療概論	瀬 川 洋	15
1	基礎歯学概論 I	安 部 仁 晴	16
1	臨床歯学概論	鈴 木 史 彦	17
1	臨床心理学	佐 藤 步	18
1	歯科医療人間学 I	中 川 敏 浩	19
1	総合演習 1 D	今 井 元	20
2	情報リテラシー II	宇佐美 晶 信	21
2	英語 II	長 峯 英 樹	22
2	日本語学 II	本 多 真 史	23
2	化学	阿 部 匡 聡	24
2	生物学	前 田 豊 信	25
2	基礎歯学概論 II	遊 佐 淳 子	26
2	歯科医療人間学 II	中 川 敏 浩	27
2	口腔解剖学	宇佐美 晶 信	28
2	口腔解剖学実習	宇佐美 晶 信	29
2	解剖学	宇佐美 晶 信	30
2	解剖学実習	宇佐美 晶 信	31
2	口腔組織学	安 部 仁 晴	32
2	口腔組織学実習	安 部 仁 晴	33
2	口腔生理学 I	川 合 宏 仁	34
2	口腔生理学実習	川 合 宏 仁	35
2	口腔生化学 I	加 藤 靖 正	36
2	口腔感染免疫学 I	玉 井 利代子	37
2	歯科薬理学 I	鈴 木 礼 子	38
2	生体材料・歯科材料学 I	石 田 喜 紀	39
2	公衆衛生学	小 林 美智代	40
2	総合演習 2 D	玉 井 利代子	41
3	歯科医療管理学	南 健太郎	42
3	社会歯科学	南 健太郎	43
3	歯科医療人間学 III	中 川 敏 浩	44
3	口腔生理学 II	川 合 宏 仁	45
3	口腔生化学 II	加 藤 靖 正	46
3	口腔生化学実習	加 藤 靖 正	47
3	口腔病理学	遊 佐 淳 子	48
3	口腔病理学実習	遊 佐 淳 子	49
3	口腔感染免疫学 II	玉 井 利代子	50
3	口腔感染免疫学実習	玉 井 利代子	51

学年	授 業 科 目	科 目 責 任 者	頁
3	歯科薬理学Ⅱ	柴田達也	52
3	歯科薬理学実習	鈴木礼子	53
3	生体材料・歯科材料学Ⅱ	石田喜紀	54
3	生体材料・歯科材料学実習	石田喜紀	55
3	口腔衛生学	廣瀬公治	56
3	口腔衛生学実習	廣瀬公治	57
3	保存修復学Ⅰ	山田嘉重	58
3	冠橋義歯補綴学Ⅰ	羽鳥弘毅	59
3	有床義歯補綴学Ⅰ	高津匡樹	60
3	有床義歯補綴学Ⅰ実習	高津匡樹	61
3	口腔外科学Ⅰ	金秀樹	62
3	口腔内科学	高田訓	63
3	歯科放射線学Ⅰ	原田卓哉	64
3	高齢者歯科学Ⅰ	鈴木史彦	65
3	災害歯科医学	板橋仁	66
3	総合臨床医学	風間咲美	67
3	総合演習3D	金秀樹	68
4	保存修復学Ⅱ	山田嘉重	69
4	保存修復学実習	山田嘉重	70
4	歯内療法学	木村裕一	71
4	歯内療法学実習	木村裕一	72
4	歯周病学	高橋慶壮	73
4	歯周病学実習	高橋慶壮	74
4	冠橋義歯補綴学Ⅱ	羽鳥弘毅	75
4	冠橋義歯補綴学実習	羽鳥弘毅	76
4	有床義歯補綴学Ⅱ	高津匡樹	77
4	有床義歯補綴学Ⅱ実習	高津匡樹	78
4	口腔インプラント学	高橋昌宏	79
4	口腔インプラント学実習	高橋昌宏	80
4	口腔外科学Ⅱ	川原一郎	81
4	口腔外科学Ⅲ	高田訓	82
4	歯科麻酔学	山崎信也	83
4	歯科矯正学	福井和徳	84
4	歯科矯正学実習	福井和徳	85
4	小児歯科学	島村和宏	86
4	小児歯科学実習	島村和宏	87
4	歯科放射線学Ⅱ	原田卓哉	88
4	高齢者歯科学Ⅱ	鈴木史彦	89
4	障害者歯科学	吉田健司	90
4	臨床総合演習	川原一郎	91
4	総合演習4D	板橋仁	92
5	臨床実習	病院長	93
6	臨床総合講義	学年主任	94

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	エレクトィブスタディ (ES)	第1～4学年
科目責任者 (記載者)	玉井 利代子	

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標は

- 1) 主体性をもって、興味・関心を持つ分野・科目を選択できる
 - 2) 主体性をもって、テーマ・目標を決めることができる
 - 3) 主体性をもって、テーマ・目標に対する方針を検討し、実行できる
 - 4) 成果・結果をまとめ、発表することができる
- である。

2) 自己点検・評価

欠席限度を超える学生は出なかったため、到達目標を概ね達成したと考えられる。

3) 改善方策

各分野・科目の事情から、希望する分野・科目に出向できない学生がどうしても出るが、次年度進級で空きが出たら優先的に配属する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

出向した分野・科目において、テーマ・目標を考えながら、生涯学修を継続できるよう個人または少人数グループ指導体制の形態で履修する。各分野・科目ごとの特色やルールがあるので、担当教員とよく相談しながら進める。

2) 自己点検・評価

学生が出向する分野・科目をユニバーサルパスポートのアンケート形式で希望を調査し、出向先を決定した。

3) 改善方策

「期待したが、やる気が感じられずがっかりだった」という声が上がったため、各科目に周知することで改善協力を求める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

各自が得ようとする成果を決定する科目であるため、教員からの成績評価は無い。毎回出席を確認する。80%以上の出席がなければ総合試験の受験資格を失う。

2) 自己点検・評価

欠席限度を超える学生は出なかったため、良好である。

3) 改善方策

各自が得ようとする成果を決定する科目であることを周知する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	情報リテラシー I	第 1 学年
科目責任者（記載者）	古山 昭	

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

CBTに対応できるよう、情報処理機器やソフトの扱いに習熟する。メールの作法やネットリテラシーについて学ぶ。

2) 自己点検・評価

基本的なofficeや画像処理ソフトの扱いは経験させることができた。最終評価では例年通り、平均点がほぼ90点になり、提出物の提出などは徹底できた。メールの作法も大部分の学生はきちんと身についた。

3) 改善方策

ChatGPTなどの生成AIの扱いを試験的に導入していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義と演習は教室でおこなうが、毎週の予習・復習をGoogle Classroomを用いて行っている。

2) 自己点検・評価

演習では落伍者を生じさせないために、講義の途中で適宜演習をストップし、ついていけない学生には挙手をししてもらい、追加のケアを行う時間を設けている。また、挙手していなくても、PC画面を見て、必要に応じてアドバイスをしている。講義の説明について行けなくても、自分のペースで演習ができるように、別途マニュアルや動画なども用意している。

3) 改善方策

説明をよりわかりやすいように点検する。応用的な難しい課題にも取り組んでいるが、難しい内容にすべてその場で対応できなくても心配しないよう伝える。まずはPCに触れてもらい、そのあと、締切を守って提出物を提出することが大事であり、評価のポイントであることを学生に理解してもらえよう努力する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期と後期に試験（20%×2）、単元別まとめ課題（8%×5）、宿題（予習課題）20%で評価を行う。

2) 自己点検・評価

PCに触れ、最低限の課題をこなし、期限通りに提出することによる評価は、十分に機能していると考ええる。

3) 改善方策

現状の評価方法で問題ないと考ええる。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	英語基礎 長峯 英樹	第1学年
--------------------	---------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

当科目の到達目標は、英文の理解スピードと精度を向上させ、自分の意見を述べるために役立つ表現を習得することである。そのために、国内外の社会問題に関する英文を題材に、(1)基礎英文法の復習、(2)語彙・構文、時事表現の増強、(3)テーマに関する多様な意見とそれぞれの根拠の理解、(4)英語で発信するための基礎スキルの習得、の4つを具体的な目標とした。

2) 自己点検・評価

入学時の各学生の能力格差も確かにあるものの、大多数の学生の英語力（とくに基礎文法力）向上に貢献できたのではないと思う。一方で、上記(4)の英語による発信スキルの向上については、当講義内で十分な時間が確保できなかった。

3) 改善方策

英文法に関してであるが、例年、「英文法不要派」が一定数存在する。しかし、前年同様、本年度（2023年度）でも英文法に対する否定的な考えをもつ学生が少なく、むしろ熱心に学ぼうとする学生も多かった。学生のニーズも年々多様化しているので、自主学习時間をしっかり確保し、学生一人一人から疑問点を聞き出し、ヒントを与え、学生自身が解決できるように助言する、といった地道な努力が必要だと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生全員に順番で英文の音読とサイトトランスレーションをしてもらい、頻出語彙や時事表現、基礎文法を解説しながら、様々な社会テーマに対する自分の意見を論理的に表現するための重要表現を覚えてもらう。学生間の英語能力格差にいかに対処するかが毎年の課題である。

2) 自己点検・評価

一般的に英語に対する苦手意識の軽減に役に立てたのではないと思う。一方で、学生間の能力や意欲の格差も前年以上に大きく、一方通行的な講義では対処が難しいことも痛感している。授業時間内に自主学習の時間をできるだけ確保し、個々の質問に対応する形式をとった。それでも、学生の授業評価から質問のしやすさと予習と復習の時間確保という点で改善の余地がまだまだあると認識している。

3) 改善方策

「解説は講義で、復習は自宅で」という学習を学生に期待するよりも、解説・質疑応答と復習もできるだけ講義内で行うようにしたい。具体的には、2つのテーマごとに、解説(60分+60分)⇒授業内での復習と疑問点解消(60分)⇒確認テスト前復習(40分)⇒確認テスト、というパターンを確立したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

筆記試験（100%）により評価し、65点以上で合格とする。なお、筆記試験は①前期定期試験、②後期定期試験、③Review Test（全8回）の合計を平均した点数で評価される。

2) 自己点検・評価

講義で解説したテーマ2つごとに確認テストを実施。前年度同様、テスト前に40分間の自習時間を設けたことで多くの学生に成績の改善が認められた。また、前年度はテストが多すぎると感じた学生が数名いたが、本年度はむしろ学んだ内容の確認のために有効であることを理解し、積極的に取り組む学生が多かった。

3) 改善方策

学んだ知識やスキルをテストという形で確認するプロセスの重要性を理解してもらいながら、上記の取り組みパターンを継続し、英語力の向上につなげていきたいと考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	英語 I 長峯 英樹	第 1 学年
--------------------	---------------	--------

調査実施年月：2025年 3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本講義は「英語基礎」で学んだテーマについて、①テキスト以外の資料を読むことで理解を深めること、②大手メディアや海外の時事ニュースに慣れること（とくにボリュームとスピード）、③グループで調査し、英語で発表すること、を目標としている。③の英語での発表に関しては、本年度においても苦手意識が強い学生が数名いたため割愛した。

2) 自己点検・評価

テキスト以外の資料を読み理解を深める点については例年以上に熱心に取り組む学生が多かった。②の時事ニュースに慣れるといった目標は、本年度も効果的に進めることができた。また、授業評価項目 8 の必要性の理解に関しては 9 割以上の学生が評価してくれた。英語の理解スピードの向上には英語学習の習慣化が不可欠であるため、各個人が行動に移せるよう、いかにサポートしていくかが今後も課題である。

3) 改善方策

英文理解のスピード向上のためには、英語学習の習慣化が不可欠であり、やはりある程度の強制力をもった学習機会が必要であると思う。全学生を対象にすることは困難であるが、希望者を対象にしたオンラインTOEIC勉強会を今後も継続し、参加者の数を増やしていくことで全体のレベルを向上させることも一つの方法だと考えている。また、時事的な英文記事を読む機会を本年度以上に設けたいと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

「英語基礎」で学んだ知識をもとに、ライティングやスピーキングといった発信力の向上を目的とした講義内容である。残念ながら、本年度もグループプレゼンテーションを割愛せざるを得なかったため、テキスト以外の英文記事の読解やライティングを中心とした指導となった。

2) 自己点検・評価

英文のライティングに関しては、「英訳」にとどまらず、基本構文やパターンを覚え、文法事項に注意しながら自分の文章にしていくことが一番効果的な方法である。しかし、例年同様、「丸暗記は役に立たない」といった考えが根強い学生も少なくない。基本構文の暗記を基礎とした方法の有効性をいかに理解して実践してもらえるかが課題である。

3) 改善方策

スピーキングやライティングは講義内容の理解だけでは上達が望めないスキルである。各学生の自宅学習に任せるよりも、基本構文を確実に覚えてもらうように、授業内で自習時間を確保する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

筆記試験(100%)により評価し、100点満点中65点以上で合格とした。なお、筆記試験は①前期定期試験、②後期定期試験の平均点で評価される。試験内容としては、単なる知識を問うのではなく、あるテーマについて自分で調べて、基本構文とパラグラフの構成をしっかり意識しながら英文を構成できているかを問うものとした。

2) 自己点検・評価

今後も改善し続ける必要はあるが、試験および評価の方向性としては妥当であると考えている。

3) 改善方策

学生の自主性に任せるだけでなく、授業内で重要語句や構文を書いて覚えてもらうなど、ある程度の強制力をもつような課題を出したい。英語への苦手意識をもつ学生からは不満が出てくることが予想されるが、有効性を実感してもらうには継続していくしかないと考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	心理学 佐藤 歩	第1学年
--------------------	-------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科には虐待やいじめ、依存症等の問題を抱える患者も来院する。患者がチェアに座った時、あざが見られたら歯科医師はそのあざからどんなことを想像するのか。その時ただ単に”ケガをしたのか”と捉えるのと”もしかしたら虐待ではないか”と捉えるのではわけが違う。現代の心の問題を取り入れた心理学を学ぶことで、人間性豊かな歯科医師として幅広い視点で患者を診る力がつくよう到達目標が作られ、授業が構成されている。

2) 自己点検・評価

学生は設定した到達目標を概ね身に付けたと考える。特に、学生評価において、授業はシラバスに沿って進行したと思いますか、という質問に対して学生は、そう思う・どちらかと言えばそう思うに96%の学生が回答している。しかし、自らシラバスやカリキュラムを確認しましたかという質問に対して、そう思わない・どちらかと言えばそう思わない、に回答した学生が12%いた。

3) 改善方策

オリエンテーションや授業の際に、シラバスやカリキュラムを確認し、それらの重要性について積極的に声をかけていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各到達目標を達成するために、科目担当者が作成したレジュメ・資料を授業時に配布している。レジュメやスライドは、学生にとって何が重要なワードなのか理解できるように工夫している。また、その目標一つ一つが、歯科医師国家試験や医療とどう繋がりがあのかについても授業で説明することを意識している。

2) 自己点検・評価

教育方法において概ね実行できたと捉えている。特に、学生評価において、教員での重要項目や特殊性、必要性を理解できましたか、という質問に対して学生は、そう思う・どちらかと言えばそう思うに全員が回答している。自由記述においても、工夫があったため”わかりやすい”といったコメントを多数受け取った。改善点は、”手元に資料はあるが、たまにスライドで説明されないことがある”といったコメントを受け取った。

3) 改善方策

学生に重要項目や特殊性、必要性を理解してもらえた背景には、レジュメやスライド等の工夫があったからであると考える。改善点においては、資料とスライドを一致させて丁寧に伝えることを意識したい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期で65点以上の者を合格としている。試験内容は、到達目標レベルに達しているかどうかを確認するため、記述・選択式で作成している。試験前に①成績評価について具体的に説明②練習問題の実施、テスト内容や出題範囲を理解できるように工夫している。不合格者に対しては、再テスト前に個別に声をかけ理解できないところがないように工夫している。

2) 自己点検・評価

成績評価においては誤解のないように、具体例を交えながら数回説明を行った。結果、成績評価について直接学生からや、学生評価の自由記述に質問等は全くなかった。

3) 改善方策

今後も細心の注意を払い、誤解のないように丁寧に成績評価について説明する機会を作っていきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	経営学 長峯 英樹	第1学年
--------------------	--------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

企業経営に興味を持ってもらうことが第一の目標である。具体的には、①基礎的な分析フレームワークの理解、②ビジネスモデルの概要理解、③論理的考察の基礎習得、④将来の経営イメージの構築、の4点である。多様な業界の事例を学ぶことにより、歯科業界にいかに応用できるかについて考察する。

2) 自己点検・評価

本年度も興味深い企業事例を紹介でき、授業外でも質問や参考図書などの問い合わせが寄せられるなど、多くの学生の好奇心を高めることができたと思う。例年と異なる点としては、基本的な会計知識を学ぶ授業を取り入れたことである。10月中旬以降、授業開始時に10分間のミニテストを行うことで、数値に裏付けられた目標を設定・検証するスキルとその必要性を理解してもらえたのではないかと、思う。

3) 改善方策

インドのアラビンド眼科がマクドナルドから、メイヨークリニックがトヨタから学んだように、医療機関が他業種から学んだイノベーションの事例を本年度以上に数多く紹介し、学生の関心をさらに高めたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

理論や分析フレームワークを学び、いくつかの事例に応用してみることで、様々な視点が存在することを学ぶ。単なる講義形式に終始することなく、各設定テーマに関する分析と議論を行い、自分の考察をまとめるように課題提出などで促す。

2) 自己点検・評価

学生による授業評価によると、本年度も気軽に質問できる雰囲気を提供する努力がまだまだ不足しているようである。また、知的好奇心をもっと刺激できるように授業内容も改善し続ける必要があると思う。やはり、医療機関への応用可能性に関する考察が必要であることを痛感した。

3) 改善方策

本学部には、歯科クリニックの経営者として活躍する将来像をもつ学生が多い。普段、英語には苦手意識が強い学生達からも経営学に関しては多くの興味深いアイデアや問題提起があった。ただ、それらは授業外に寄せられることから、できれば授業内で活発に意見交換できるような工夫をしたい。グループワークはもちろん、通常の授業でも発言を活発化させる機会を設けたい。また、医療機関の事例も増やしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(80%)、課題提出(10%)、グループ発表(10%)により評価。知識を問うよりも、学んだ内容をもとに将来の経営イメージを論述してもらう試験内容とした。

2) 自己点検・評価

出題の方向性としては間違っていないと思う。一方で、本年度においても授業で学んだビジネスモデルやフレームワークを意識できていない学生も数名いたため、この点に関する指示が不十分であったと思う。

3) 改善方策

授業で学んだ内容を意識した経営イメージができているか、最終講義時に確認する時間を確保したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	日本語学 I 本多 真史	第 1 学年
--------------------	-----------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学での学習・研究および歯科医師としての実務において必要となる日本語運用能力の基盤を確立するため、読む、聞く、話す、書く」の基本姿勢、知識、技能および書籍・論文・資料の読解の能力を修得することを目標としている。授業内容は、これに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価

目標と授業内容は合致している。また、受講生全員(休学者を除く)が合格したことから、科目の目標は達成されたと考える。「学生による授業評価アンケート」でも、大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

3) 改善方策

到達目標と授業内容は一致しており、変更の必要はないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

『大学生のための日本語表現トレーニング・スキルアップ編』を使用して講義しつつ、演習形式を取り入れている。担当者の話を聞き(インプット)、理解し、思考して(プロセッシング)、まとめる(アウトプット)という一連の行為が円滑に行うことができるようになるための機会を設けた。また、講義・演習とも、聴覚的な効果をねらい、パワーポイントで作成した資料をプロジェクターを使用してスクリーンに映した。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートでは、「好奇心が刺激されたり、興味が高まったりしたか」の評価が低かった。多くの受講生の中に、「自分は日本語を学ぶ必要がない」との認識が前提としてある。その認識を打ち壊すことができなかったことに加え、学生の知識欲に応えられなかったと思われる。

3) 改善方策

アンケートから、日本語運用能力を軽んずる学生がいると判断される。受講者自身の意識に問題があり、むしろそれが日本語運用能力を伸び悩ませている原因であると考えられる。受講生の関心により近い内容を盛り込み、自主的に「日本語について学ぶ」ように仕向けていくつもりである。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(70%)、課題等の提出状況およびその内容(30%)として、総合的に評価した。課題は採点后に返却し、次の授業で解説を行った。

2) 自己点検・評価

本科目の合格率は100%であり、成績評価に関して問題ないとする。

3) 改善方策

成績評価の改善は要しない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	医療倫理学 長岡 正博	第1学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

目標として、医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務・社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針を考えることができるようになるを設定したが、医療の特殊性を鑑み高い倫理観が必要とされることは理解して頂いたと考えている。しかし、社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針に関して、第1学年という時期であることもあり自分自身のこととしては見られていないように感じた。

2) 自己点検・評価

一般的な倫理と医療倫理の違いを医療の特殊性を解説した上で、その必要性を理解し習得して頂いたと考えている。到達目標として④現代医療の倫理問題について説明できる。⑤臨床現場で直面する倫理的問題を説明できる。とあるが、自分自身が当事者であり身に降りかかる問題として考えてもらいが、授業評価を観ると個人で差が大きく全体としては伝わっていなかったように思える。

3) 改善方策

医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務に関しては、一律に話すのではなく特に重要となる箇所を強く伝えることでより印象に残るようにしていきたいと考えます。現代医療の倫理的問題については、日々のニュースで取り上げられる話題をテーマとして出すことで学生の興味や関心を引くことが必要であると思います。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

目標として、医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務・社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針を考えることができるようになるを設定してある。倫理学の成り立ちから丁寧に解説しているがどうしてもプリントを文字が占めてしまい、学生にとってはわかりづらい資料になっていたかもしれない。

2) 自己点検・評価

本科目を担当するに当たり学生に国家試験や模試などでどのように取り上げられているか検討し講義資料を作成し伝わりやすい形式を模索し実施した。

对国家試験という意味での医療倫理学としては十分に教授できていると思うが、医療倫理学において学問的に重要な内容に対してどのように重要性を伝えればいいのか伝わり難い表現になってしまった点があつた。

3) 改善方策

スライドやプリントといった講義資料のなかで特に覚えて欲しい内容には太字や色を変えることで視覚的に重要であることを意識して貰えるように構成する。口頭で繰り返し伝えていく。学生からの要望として「資料を配布するだけでなく、こちらが何か作業できるように(穴埋めなど)して欲しい」とあった。今までの講義経験から穴埋め部分しか注目しない学生がいることから行っていないが他の方策を考えたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

しっかりと言葉を理解・把握しているかを確認したいので記述式で試験を行っている。定期試験の結果は平均で76、最終評価の平均が80.8で悪い結果ではないと考えている。不合格者の答案用紙を確認したところ一切埋められてはおらず、勉強しないと点数が取れない試験になっていたと思う。

2) 自己点検・評価

試験結果は妥当と考えています。しかし、学生の授業評価では予習と復習に関する項目で期待している結果ではなかった。予習に関しては学生の興味を引き出すことは出来なかった受け止める必要がある。復習に関しては講義で学んだ内容を考える時間を誘導することが出来なかったことを意味する。講義内での取り上げ方と興味を引く話題作成に対策が必要であると感じました。

3) 改善方策

講義のテーマごとに課題を出題し講義時間外に倫理的問題を考える時間を誘導することで予習復習時間を上げ結果的に医療倫理学の試験勉強になるような課題作成を行いたいと考えています。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	基礎物理学 荒木 威	第1学年
--------------------	---------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯学部学生にとって重要となる「力、エネルギー、熱、X線、放射線」にテーマを絞って授業を進めている。基本的な知識を習得させるとともに、演習問題を通じて(1)問題文を読み解く力、(2)論理的思考に基づいた問題解決能力、(3)初等関数を含む計算力、を養うことを目標としている。

2) 自己点検・評価

講義内容に関しては問題なかった。不満の声もなかった。目標に掲げた(1)-(3)のバランスも適度であった。難易度に関して「簡単すぎる」、「適度だった」、「難しすぎる」など多岐にわたる意見が学生から寄せられた。学生間の学力差が大き過ぎるため判断が難しいが、例年との比較、他科目との比較を鑑みるに、適度な難易度であったと考える。

3) 改善方策

講義内容は現状を維持する。難易度に関しては、学生の学力に合わせ可能な限り個別に対応する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

プロジェクターを用いた講義を行った後、その内容に沿った演習を実施している。復習が円滑に行えるように、講義資料と演習問題は全て授業開始時に配布している。演習問題の題材にできるだけ医療、人体、健康に関するものを取り上げ、学生が興味を持ちやすいように心がけている。演習中は教員への質問や学生同士の議論を推奨している。正答率の低かった問題は次回授業で解説を行っている。

2) 自己点検・評価

講義に関して、学生から「分かりやすい」「見やすい」など好意的な意見が聞かれた一方、講義資料に関して「どれが公式なのか分かりづらい」との意見もあった。改善が必要であると考え。演習問題の内容に関しては問題なかった。不満の声もなかった。学生から「演習の際に騒がしいときがある」、「高難易度の問題の詳細解説が欲しい」、「試験前の練習問題が欲しい」との意見があった。一部改善が必要であると考え。

3) 改善方策

公式をもっと強調するよう講義資料を推敲する。演習中は議論を推奨しているため、多少騒がしくなるのは我慢してもらう必要があるが、単なる雑談をしている学生は注意する。高難易度の問題は物理学が得意な一部の学生向けであり、授業中に解説を行うのは不適切であると思われる。解説資料をユニパに掲載するなどして、学生が希望に応じて閲覧できるようにする。試験前の練習問題として過去問解説を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

授業毎に行う演習課題、中間試験、定期試験の点数をもとに、演習20%、中間試験40%、定期試験40%の割合で評価している。進級基準に満たなかった学生には、前期末と後期末に再試験を実施している。

2) 自己点検・評価

成績評価の方法に関しては問題はなかった。不満の声もなかった。学生から「試験の配点が不明瞭である」との意見が寄せられた。次年度は改善する。

3) 改善方策

成績評価に関しては現状を維持する。試験問題に配点を明記する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	基礎化学 斎藤 昇太郎	第1学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高等学校レベルの化学的知識を理解・習得し、さらに基礎科目・臨床科目の理解・習得に必要な知識を得ることにある。化学に苦手意識のある学生にとって困難すぎる到達目標とならないよう、高等学校の初等レベルの内容を到達目標の一部とし、また、既習者にとって平易すぎる到達目標とならないよう、大学の一般レベルの内容も到達目標の一部としている。これによって講義内容のバランスを確保している。

2) 自己点検・評価

毎週課す宿題の解答内容・状況により、学生のレベルに応じて講義内容、および科目選択ゼミナールでの取り扱い内容を調整した。シラバスに記載した到達目標は、定期試験・再試験の解答内容から、多くの学生において達成されているものと考えられる。

3) 改善方策

他の教養系科目や基礎系科目との連動性の高い内容の取扱いを重点化に取り組み、取り扱う項目を追加・削除した。近年、学生の学力に明らかな低下が見られるため、講義内容の削減に取り組んでいるが、難しい・内容が多いと感じる学生が依然多くあり、学生個々にとって必要な学習分量を自覚させるように促す。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生にはシラバスを参照しながら予習するように指導し、主に板書により教科書の内容を中心に説明、配布する課題によって復習を促し、課題を返却し誤りとなる扱いなどをフィードバックしている。

2) 自己点検・評価

配布課題によって週ごとに学生の理解状況を把握しつつ、学生の誤答すべてに模範解答・減点理由を記載して、双方向性を確保した。これについては、学生からも評価を得ている。また、化学を苦手とする学生向けに自由参加の少人数制補講を実施することで個々に理解が足りない部分を直接聞き取り、解説した。

3) 改善方策

板書と口頭説明において、より学生に親しみやすい事項に触れる方策を取り、授業評価における「教育を受け知的好奇心が刺激されたり、興味が高まりましたか」という内容において、全体の96%が、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答した。引き続き、特に口頭説明において、興味関心が高まるような内容を取り込むこととする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験を80点、提出課題を20点満点とし、100点満点としている。

2) 自己点検・評価

提出課題点は、毎週課す課題の解答内容が不良である場合に追加課題を与え、全ての課題を提出した学生が満点となるよう指導した。評価方法に問題はないと考えているが、一部の学生より、課題点を無くして中間試験にして欲しいとの要望があったことから、試験形式の提出物を施行する。

3) 改善方策

中間試験の実施は他科目と時期が重なることや、実習のレポートによる負担感が大きいとの意見があるため、2025年度も実施しない。毎週の提出課題は、各講義の復習、定期試験に向けた教材の位置づけであり、内容は概ね好評であると考えられるため、概ね現状を維持する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	化学実験 阿部 匡聡	第1学年
--------------------	---------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

教本を読み実験操作・手順を理解し、定量分析・有機定性分析についての基本的知識、基本的技能を習得するため、①教本に示された手順通りに実験を行う ②実験器具を正しく取り扱う ③精密測容器具の目盛りを正確に読み取る ④実験の過程で進行した反応を説明する ⑤測定データや観察結果を正確に記録する ⑥記録に基づいて正確なレポートを作成する、を到達目標としている。

2) 自己点検・評価

目標としては、適切であると考えている。

3) 改善方策

修正・変更は特にしない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

始めに、その回の実験内容の重要事項と実験操作上の注意事項を説明し、その後、個人で、あるいは3～4人のグループで実験を進めていく。正確で安全な実験操作が行われているか、常にチェックし、適宜、指導を行う。結果を正確に記録させるとともに、結果のもつ意味を考えるよう導く。

2) 自己点検・評価

授業評価の自由記載欄に、「器具や用品がわかりやすく並べてあった。」「実験の説明がわかりやすかった。」「質問したら何でもよく教えてくれた。実験の補助がありがたかった。」などの記載があった。試薬類・機器の配置、実験進行の流れ、指導法は、適切であると考えている。

3) 改善方策

グループで行う実験では、適切な役割分担・連携ができているかチェックし、必要に応じて指導する。実験の進行が極端に遅い学生がいる場合、作業を効率的に進められるよう誘導する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

レポート 69%、演習 21%、受講態度 10% により評価した。

2) 自己点検・評価

評価法としては、適切であると考えている。

3) 改善方策

評価法の修正・変更は特にしない。欠席すると、その回のレポートの得点を放棄することになるので、安易に欠席しないよう、その点の周知徹底を図る。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎生物学	第1学年
(記載者)	今井 元	

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標は、「歯学部基礎科目で修得する学習項目」を理解し、「動物の体制(構造と機能)」について「個体の階層性(細胞→組織→器官→器官系)」の順に系統的に修得し、「その成り立ち」について理解することである。到達目標は、1. 細胞 2. 組織 3. 器官 4. 器官系の基本構造と機能、5. 刺激の受容と反応 6. 体内環境の調節と恒常性の維持、7. 系統発生と個体発生 及び 多様性を説明できることである。

2) 自己点検・評価

成績上位(80%)の学生は、①「歯学部基礎科目で修得すべき学習項目」②「個体の階層性」③「細胞・組織の構造と機能」、④「器官・器官系における刺激の受容と反応・体内環境の調節」⑤「系統発生と個体発生及び多様性」などを系統的に説明できるようになった。成績下位の(20%)の学生は、1年生のうちに上記①～⑤の人体の構造の全体像とその機能の概要を系統的に学ぶ重要性を理解させられなかった。

3) 改善方策

来年度は、補講時間を用いて、理解できない学生に対して、もっと丁寧に説明することとする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

履修方法は、学習効果ピラミッドに準じて行なっている。
具体的には、「細胞の構造」・「脊椎動物の組織」・「刺激の受容と反応」・「体内環境の維持」・「生物の個体発生と系統発生」・「生態と行動」についての講義を聴講・理解し、各講義に対する課題(問題形式)について討議した後、課題の解答をサポートにまとめ、教え合うことによって長期記憶を形成する。

2) 自己点検・評価

以下の良い点と悪い点の2点ずつ、指摘があった。
良い点: 1) 沢山のプリントをくれること 2) カラーの図を使ってくれること 3) 覚え方を教えてくれること
悪い点: 1) プリントの量が多い 2) プリントの枚数を増やしても良いので、もう少し文字を大きくしてほしい。
3) 文字が小さく、読みにくい。

3) 改善方策

前期の実習講義(高校生物)の範囲では、プリントの文字の大きさについて指摘は少なかったのですが、後期の範囲のプリントの量は多くなって良いので、文字を大きくしようと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期・後期の中間試験と定期試験(計4区分)で評価している。すなわち、第1区分: 前期中間「細胞の構造・脊椎動物の組織」/第2区分: 前期定期「刺激の受容と反応(神経系と内分泌系)」/第3区分: 後期中間「体内環境の維持(各器官系の調節)」/第4区分: 後期定期「生物の個体発生」を行い、各区分毎の試験の得点にて評価し、最終評価は4区分の平均とし、65点以上を合格としている。

2) 自己点検・評価

再試験の受験者は3名で、1名不合格者を出してしまった。1D総合試験では、正答率80%程度だったので、1年生の評価としては良いと考えているが、

3) 改善方策

来年は全員合格させられるように、さらに努力したい。1D総合試験では、正答率90%以上を目指す。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	生物学実験 今井 元	第1学年
--------------------	---------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目においては、動物愛護の精神(3R)を学んだ上で、植物、動物、微生物を材料とした顕微鏡観察から生命体の基本構造(細胞・オルガネラ・組織・細胞分裂)を把握する。また、カエルを用いた肉眼解剖により、個体(脊椎動物)における各器官の構造と配列など基本的体制、発生過程を把握する。また、これらの実験を通して、実験の心構え、ルール、レポート作成法を修得することにより、科学論文の構成を学ぶ。

2) 自己点検・評価

ほとんどの学生に、1)動物愛護の精神(3R)の理解・心構え 2)顕微鏡・解剖器具の使用法 3)化学染色法などの試料作成法 4)細胞構造・細胞分裂・胚発生の過程 5)器官と各器官系の分類 6)実験結果のまとめ方(レポートの作成法)などを修得させることができた。しかしながら、一部の学生は、『提出が遅れる、訂正後の再提出ができない』など、実習の心構えとレポートの重要性について理解させられなかった。

3) 改善方策

『レポート提出が遅れる学生』に対して、学修する順番の重要性について説明して、期日までに提出させる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

ガイダンスにおいて、動物愛護の精神を強調した上で、扱う生物の基礎知識・実験の目的・手順・関連する基礎医学的知識を説明する。

顕微鏡と実験器具との適正な使用法を学んだ上で、様々な細胞やオルガネラ構造などを詳細に観察し、スケッチする実習を行う。また、カエルの解剖を行い、各器官の構成や配列などを詳細に観察し、スケッチする実習を行う。実験に関するレポート作成し、論文の読み方や作成法の基礎を学ぶ。

2) 自己点検・評価

本年度、下記のような指摘を受けた。多くの学生からは、良い評価をしていただいたが、約3名の学生は、以下のような改善点が指摘された。

- 1) A3の文字が読みづらいです。
- 2) 学習部(レポートの一部)を返却して欲しい。

3) 改善方策

- 1) プリントの読みづらい部分を毎回聞き、改善して再配布しようと思う。
- 2) 学習部(レポートの一部)を返却して欲しい。との要望により、本年度は、学習部はレポートの一部であることを強調して、事前に自分でコピー、または、スキャンして置くことが必要であることを説明したが、聞けていない学生がいたので、来年度は、学習部(レポートの一部)はノートとして提出させ、試験の際に返却しようと思う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

レポート点で100%評価する。評価は、40点満点のレポートを12回提出し、最低点から2回分を削除し、全10回で評価する。提出期限に遅れた場合は4点/1日が減ぜられる。未提出+無断欠席がN回の場合、Nが1で90点満点、2で80点満点、3で70点満点となる。評価の計算式は、 $評価点 = \{(12回 - N回) \times 総点 - 最低2回削除\} \times 2.5 \div 10回$ 。65点以上を合格とし、不合格者は再レポートで加点している。

2) 自己点検・評価

殆どの学生は、レポートの期限内に提出の重要性を理解させることができたが、1名、レポートの期限を守って提出することができない学生(不合格者)、基準点(65点)をとってこれず、レポートでは合格させられなかった。そこで、年度末に再レポートとして実習試験を行い、合格させることができた。

3) 改善方策

1年生のうちに、レポートを期限内に提出することの重要性を理解させることが重要なので、実習開始前に救済措置は行わず、レポートのみで判断することを強調するようにする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科医学演習 鈴木 史彦	第1学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医学演習は、専門課程における各科実習を行うために、基礎的な技術訓練に係る知識、技能および態度を習得することを目的としている。15コマそれぞれの担当科目ごとに到達目標が設定されている。

2) 自己点検・評価

本科目の長所は、それぞれ専門分野の担当者が2コマずつ演習を行うことで、幅広く歯科医学に関する演習を行える点である。一方、問題点はそれぞれの専門科目が統一したフォーマットでの演習は実施していないため、担当者によって演習内容にばらつきがでる可能性があることである。

3) 改善方策

学生の授業評価では、特に改善を要する点は記載されていなかった。「色々な講師の方と、その専門について学べるので毎回新鮮だった」といった学生からの意見が複数あったことから、この長所をさらに伸ばできるように各担当者に講義内容のブラッシュアップを図ってもらう。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

スライドと資料を使用し、各分野の特徴的な技術を演習形式で履修する。事前学習は15分、事後学習は30分に設定されている。

2) 自己点検・評価

事前学習は実施している者と実施していない者を4段階で評価したした場合、それぞれ同数程度であった。事後学習も実施している者がやや増えたものの、事前学習と同様の傾向にあった。専門的な分野の演習であることから、事前・事後学習は困難であることが予想される。

3) 改善方策

事後学習しやすい資料の作成や、演習後のフィードバックを行うことで、事後学習がしやすい状況をつくるのが良いのではないかと考える。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

各担当教員から100点満点として提出された点数を合計し、担当教員数で割った点数を評価点として65点以上の者を合格としている。

2) 自己点検・評価

本科目は定期試験がないことから、各回の授業での評価が最終成績となる。本年度は、全員が合格点に達していた。

3) 改善方策

評価方法が各担当者にまかされているため、評価の客観性が曖昧な部分がある。単に点数を提示してもらうだけでなく、なぜその点数となったのかの理由を記載してもらうとよいと考えられる。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科医療概論 瀬川 洋	第1学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医療概論を通じて、これから学ぶ歯科医学・医療の本質を正しく理解するとともに、歯科医学を学ぶ意欲と歯科医師としての基本的態度を身につけることを修得させる。

2) 自己点検・評価

入学後のまもない時期に座学のみで歯科医学・医療の本質を正しく理解させることは困難を窮めるが、人間性豊かな歯科医師としての心構えと目標設定の糸口につながると考えている。

3) 改善方策

座学による知識の付与のみならず、入学後のまもない時期に附属病院で実際の医療現場を体験学修することにより、歯科医師となる使命感と魅力に目覚めることからコロナ禍で中断している病院見学を早期に再開する必要性を痛感している。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

主に投影視覚媒体を用いての講義を行い、適宜、テーマに即した受動型学習から能動型学習への切り替えを行う問題解決型の演習を行っている。授業の最後に「本日の振り返り」として講義内容や要望を200字以内で記載・提出をさせ、授業の改善点をに努めている。

2) 自己点検・評価

スライド中心の講義はわかりやすいという評価の反面、単調になりこともあり、双方向性の講義に努める必要がある。

3) 改善方策

スライドは文字だけではなく、動画を取り入れるなど、学生が興味を持つよう、教育方法の改善に努める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

動画を視聴後、その内容に即した質問などの筆記試験にて評価し、65点以上を合格としている。

2) 自己点検・評価

今年度は体調不良などにより、欠席したW学生はなく、全員、評価基準を達成し、合格となった。

3) 改善方策

今後もこの方法で評価を実施するが紙媒体による提出からWebによる提出も視野に入れながら検討したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	基礎歯学概論 I 安部 仁晴	第 1 学年
--------------------	-------------------	--------

調査実施年月：2025年 3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『病態を解析するための基礎となる第2学年時の履修科目である専門基礎科目を中心に、その知識を習得する。』として、各科目における最重要項目に焦点をあて、到達目標を設定し、基本的な知識の習得を心がけた。口腔解剖学、口腔組織学、口腔生理学および口腔感染免疫学の各分野より、講義内容に沿った到達目標を設定し、複数の教員で分担して講義を行った。

2) 自己点検・評価

次年度に履修する教科で構成したが、重要項目を解りやすく説明することで、一定の知識を習得し、次年度以降の基礎をつくることができた。また、歯科医療との関連性や国家試験の問題例を提示することで、学生の授業評価にもあるように『知的好奇心が刺激されたり、興味が高まった』『重要項目や特殊性、必要性を理解できた』の項目が高評価につながったものとする。

3) 改善方策

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、科目間で達成度に差がみられるため、1コマで講義する内容、重要事項を量的に限定する必要性があり、具体的には1コマで選択肢問題で5問作成できる量とすることを各担当者に周知徹底する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学、口腔組織学、口腔生理学および口腔感染免疫学の各分野、各担当者により教育方法は異なる。講義内容のプリントを作成、スライドまたは板書による重要事項の解説、問題演習と多岐にわたっていた。

2) 自己点検・評価

教育方法を単一化しなかったことで、各担当者により様々なバリエーションが生まれ、学生の好奇心を刺激し、歯科医学に興味を持たせることができていると考える。教本を指定していないため予習する手段として、授業資料の事前配布や授業資料提示システムに事前に講義プリント等の資料をアップロードしていただくよう担当者に進言した結果、以前のように『予習を行わない』との意見は減少してきた。

3) 改善方策

概ね良好に教育されていると考えるが、予習のための手段として、事前に講義プリント等の資料をアップロードしていただくよう担当者に進言する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価は、前後期の定期試験のみで評価した。

2) 自己点検・評価

定期試験と追再試験で、ほぼ全ての学生は合格基準に達していた。しかし、基準に達しなかった学生も3名いた。

3) 改善方策

定期試験と追再試験で、多くの学生は合格基準に達していたため、評価方法を変更する必要性はないと考える。しかし、追再試験を実施する前に、フィードバックする時間を設け、習熟度を向上させたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	臨床歯学概論 鈴木 史彦	第1学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床歯学概論は歯科医学・歯科医療を学ぶ目標を設定するために、歯科医療の現場を視覚的に理解し、歯科医療を行う上での問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決できる力を身につけることを目的としている。15コマそれぞれの担当科目ごとに到達目標が設定されている。

2) 自己点検・評価

本科目の長所は、それぞれ専門分野の担当者が1コマずつ講義を行うことで、幅広く臨床歯学を理解しやすい点である。一方、問題点はそれぞれの科目で統一したフォーマットでの授業は実施していないため、担当者によって講義内容にばらつきがでる可能性があることである。

3) 改善方策

学生の授業評価では、特に改善を要する点は記載されていなかった。「色々な講師の方と、その専門について学べるので毎回新鮮だった」といった学生からの意見が複数あったことから、この長所をさらに伸ばできるように各担当者に講義内容のブラッシュアップを図ってもらう。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

基本的には講義形式でスライドと資料を使用して履修してもらう。事前学習は15分、事後学習は30分に設定されている。

2) 自己点検・評価

事前学習は実施している者と実施していない者を4段階で評価したした場合、それぞれ同数程度であった。一方、事後学習は実施している者が多かった。専門的な分野であり、事前学習は困難であることが予想される。

3) 改善方策

シラバスの事前学修には「科目の概要、一般目標、到達目標および授業内容を認識しておく。」と記載されている。しかしながら、具体的にどのような学修をしたら良いかわかりづらいことから、講義よりも数日前には資料をユニバーサルサポートで提示しておくのが良いと考えられる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

各担当教員から100点満点として提出された点数を合計し、担当教員数で割った点数を評価点として65点以上の者を合格としている。

2) 自己点検・評価

本科目は定期試験がないことから、各回の授業での評価が最終成績となる。本年度は、全員が合格点に達していた。

3) 改善方策

評価方法が各担当者にまかされているため、評価の客観性が曖昧な部分がある。単に点数を提示してもらうだけでなく、なぜその点数となったのかの理由を記載してもらうとよいと考えられる。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	臨床心理学 佐藤 歩	第1学年
--------------------	---------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科治療を求める患者さんの中に、精神疾患や神経発達症を抱える方も多数来院するため、各疾患について正しい知識を身に付ける必要がある。さらに、患者と関わる上で、思いやりを持った言動を心がけると共に、患者を尊重することの重要性を理解しなければならない。上記内容を踏まえ到達目標を設定し、授業を構成している。

2) 自己点検・評価

学生は設定した到達目標を概ね身に付けたと考える。学生評価において、授業はシラバスに沿って進行したと思いませんか、という質問に対して学生は、そう思う・どちらかと言えばそう思うに96%の学生が回答している。しかし、自らシラバスやカリキュラムを確認しましたかという質問に対して、そう思わない・どちらかと言えばそう思わない、に回答した学生が約20% (5名) いた。

3) 改善方策

オリエンテーションや授業の際に、シラバスやカリキュラムを確認し、それらの重要性について積極的に声をかけていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各到達目標を達成するために、科目担当者が作成したレジュメ・資料を授業時に配布している。レジュメやスライドは、学生にとって何が重要なワードなのか理解できるように工夫している。また、その目標一つ一つが、歯科医師国家試験や医療とどう繋がりがいいのかについても授業で説明することを意識している。

2) 自己点検・評価

教育方法において概ね実行できたと捉えている。学生評価では、教員での重要項目や特殊性、必要性を理解できましたか、という質問に対して、そう思う・どちらかと言えばそう思うに回答した学生が96%だった。自由記述では、“聞きやすい・わかりやすい” “配布資料の量や内容がよい” 等のコメントを受け取った。改善点は、“授業時間のオーバー” “動画再生やスライドが動かず待ち時間が発生” というコメントを受け取った。

3) 改善方策

学生に重要項目や特殊性、必要性を理解してもらえた背景には、レジュメやスライド等の工夫があったからであると考える。改善点においては①授業内容の量を調整する②事前にパワーポイントや動画が動くかどうか確かめる、機材を調整してもらえるよう関係者に声をかけていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期で65点以上の者を合格としている。試験内容は、到達目標レベルに達しているかどうかを確認するため、記述・選択式で作成している。試験前に①成績評価について具体的に説明②練習問題の実施、テスト内容や出題範囲を理解できるように工夫している。不合格者に対しては、再テスト前に個別に声をかけ理解できないところがないように工夫している。

2) 自己点検・評価

成績評価においては誤解のないように、具体例を交えながら数回説明を行った。結果、成績評価について直接学生からや、学生評価の自由記述に質問等は全くなかった。今後も細心の注意を払い、誤解のないように丁寧に説明する機会を作っていきたい。

3) 改善方策

今後も、科目担当者から積極的に説明し、成績評価について誤解がないようにしていきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	医療人間学 I 中川 敏浩	第 1 学年
--------------------	------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標である『基本的なコミュニケーションや日常習慣の重要性を認識する態度、知識および技能を修得する』ことを最重要として、複数の教員で分担し行った。

2) 自己点検・評価

講義毎に重要項目についての留意させながら、一般的コミュニケーションのみならず、医療現場との関連させていけるよう、事例を交えまたシュミレーショナルな実技も含め行った。当初は全体の前での発言、発表にはとまどうような場面もみられたが、進めるにつれて学生の意識も高まり、授業評価アンケートでは高い満足度が示された。

3) 改善方策

コミュニケーションを育成してゆくとのグループセッションや自己表現パフォーマンスを高めることなどでは苦手あるいは不慣れな学生も見受けられたが、医療人間学は1年生から3年生までの継続科目でもあり、性急にはなく長い目で、「育てる」という意識で接してゆきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義のみでなく、挨拶から始まり、自己表現、対人対応状況などをビデオ撮影して客観的にも自覚・向上をめざす。将来の患者対応を見据え、要点をまとめ伝える力、傾聴能力を高め相手の主張、ポイントをつかむことができるよう模擬会話なども行っている。

2) 自己点検・評価

学生からの授業アンケートからは高い満足度が得られたと評価された。
コミュニケーションということに主眼をおく本科目の特殊性から、一部、学生においても積極的な者、消極的な者と温度差がみられた。

3) 改善方策

全体に向けた講義のほかには学生個人個人とより深く接することで人間性を豊かに育てるようにしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

筆記試験
自己表現のビデオ撮影

2) 自己点検・評価

ほぼ全ての学生は合格基準に達していた。

3) 改善方策

コミュニケーション能力には個人差が大きく、不十分と思われる学生に対しては個々に時間外も利用し対応してゆきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	総合演習 1 D 今井 元	第 1 学年
--------------------	------------------	--------

調査実施年月：2025年 3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医療人として確かな教養，必要な心構えと態度（道徳観・倫理観・創造力・探求心・研究志向・問題解決力・コミュニケーション・プロフェッショナリズム）を理解した上で，チーム医療を実践できる豊かな人間性を修得する，【チーム医療学演習】の講演と演習を行い，余剰の時間では学年末の総合試験に合格できる総合力を身につけるための，【効果的学習法（補講や形成的試験）】を行なった。

2) 自己点検・評価

(1)【チーム医療学演習】では，長期記憶の形成のため講演後に講演についてのディスカッションさせ，レポートを書かせたが，90%の学生は内容を理解していたと思われるが，10%の学生は講演の意味を取り違えていた。(2)また，【効果的学習法】では，基礎生物学の時間が多くなってしまった。

3) 改善方策

(1)に対しては，レポートの再提出を求める。(2)に対しては，化学・物理・数理などの先生にももっと補講や形成的試験の参加をお願いする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

【チーム医療学演習】では，講演＋スモールグループ・ディスカッション，または，講演＋演習形式（病院見学・MT研修・ワールドカフェ・問題解決型演習）などの方法を用いて，【効果的学習法】では，1D総合試験で合格点が取れるような補講・演習・形成的試験などの方法を用いて，教育を行なっている。

2) 自己点検・評価

本科目の科目責任者が担当している，基礎生物学の補講・演習・形成的試験が多くなってしまった。

3) 改善方策

総合試験にクリアーできない学生は，定期試験において理数系の科目において，合格点を取れない学生であったので，前期定期試験の結果を鑑み，【チーム医療学演習】の余剰時間を用いて，後期に重点的に補講を行なっていただく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

【チーム医療学演習】においては，レポートの合格基準を設けて，基準をクリアーすれば出席とした。80%の出席点をもって，1D総合試験の受験資格の獲得できるものとしている。【効果的学習法】では，1D総合試験で72.00%以上の学生を合格としている。

2) 自己点検・評価

【チーム医療学演習】は，全員80%の出席をクリアーし，1D総合試験の受験資格を獲得した。しかしながら，1D総合試験の本試験と再試験において，72.00%をクリアーできない学生が3名いた。

3) 改善方策

理数系の科目において，前期定期試験の結果を鑑み，【チーム医療学演習】の余剰時間で行う【効果的学習法】を用いて，後期に重点的に補講を行なっていただく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	情報リテラシーⅡ 宇佐美 晶信	第2学年
--------------------	--------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

コンピュータを用いて問題作成し、それを相互にブラッシュアップし、作成問題及びその関連項目について教員からの解説をおこなうことにより、歯科基礎医学の知識をより深く習得することを目標としている。

2) 自己点検・評価

ほとんどの学生が「シラバスに沿って進行したと思いますか」、「授業の目的や概要の説明がありましたか」に「そう思う」と回答している。

3) 改善方策

次年度からは年度の最初に、科目の概要を説明することを予定している。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

問題作成、ブラッシュアップ、問題解説の3回を1つのセッションとしている。「問題作成」は教員より出された課題についてグループごとに学生個人で問題を作成し、「ブラッシュアップ」は他グループの作成した問題について行っている。「問題解説」として作成した問題に対して最終的に教員からの解説を行っている。

2) 自己点検・評価

「情報リテラシーって各科目の理解度確認に行うものなのでしょうか？」など科目名と、評価方法に違和感を感じるという回答が複数みられた。

3) 改善方策

「リテラシー」とは「ある分野に関する知識やそれを活用する能力」であり、担当科目の問題について、知識を整理して、適切に回答できるようになる学修習慣の獲得を目的としていることを年度の最初にアナウンスしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

3コマごとに小テストをおこない合計が65点以上を合格としている。

2) 自己点検・評価

予習・復習を行った学生数が過半数を超えている。学生のブラッシュアップ問題に対する教員からの解説を行った後にテストをおこなっているため理解を深められていると考えるので現状の評価を続けていきたい。

3) 改善方策

いまでもしっかりアナウンスしているが、テストを行う回の講義を欠席すると20%分の評価がなくなる点を一層周知したい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	英語Ⅱ 長峯 英樹	第2学年
--------------------	--------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目の到達目標は、下記の3点である。
①歯科医療英語の基本的な語彙と表現、接頭辞、接尾辞を覚える。
②基礎文法を復習し、表現方法の細やかなニュアンスを理解できるようになる。
③英文を「訳せる」だけで満足せず、知識を英語で「吸収できる」ようになる。
一部の学生を除き、全体的な達成度としては高かったのではないかと考える。

2) 自己点検・評価

「読む」「聞く」「話す」「書く」といった4スキルのなかでも、しっかり「読む」ために語彙力と読解力の強化を強く望む学生が多く、そうした学生に対してはかなり貢献できたのではないかと思う。一方で、英語学習に対するニーズも意欲も多様であるため、学習方法も含め、学生からの質問に対し柔軟にアドバイスすることを心掛けた。

3) 改善方策

大多数の学生が、国家試験を意識した英語授業を強く希望しているため、歯科医療分野の語彙力や読解力強化に特化することが有効であると感じた。また、将来的に有用かどうかについても強く意識していることから、今後も、WHOやメイヨークリニックといった海外医療機関のHPなども教材として積極的に講義に取り入れていく必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

①基礎文法力・読解力の向上を図りつつ、専門用語や頻出語彙表現の習得、②各語彙の接頭辞や接尾辞を意識した語彙力強化を示した。①と②は「解説は講義で、予習や復習は自宅で」という方法ではなく、授業内に覚える方針にした。具体的には、講義60分、自主学習100分、確認テスト20分の時間配分とパターンで実施した。

2) 自己点検・評価

文法・語彙、そして読解の基礎については、範囲を限定し、重要ポイントを明示したため、大部分の学生に集中的かつ効率的に学んでもらうことができた。その一方、語彙力強化には「書いて覚える」プロセスが不可欠だが、説明により納得してもらっただけでは不十分であるため、授業内で実践する時間を設ける必要がある。

3) 改善方策

国家試験合格が第一の目標である学生にとって、英語に貴重な自宅学習の時間を割くのは困難である。また、学習方法がわからないといった学生も少なくない。そのため、一方通行的な講義ではなく、授業内に主体的に学ぶ時間を確保し、必要に応じて学習方法を提案し、重要表現を確実に覚えてもらう方法を今後も模索する。具体的には、講義60分、自主学習100分、確認テスト20分の時間配分で授業内に覚えてもらう。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

筆記試験(100%)により評価し、100点満点中65点以上を合格とした。なお、筆記試験は①前期定期試験、②後期定期試験、③Review Test(全6回)の合計を平均した点数で評価した。

2) 自己点検・評価

確認テストや定期試験の範囲と出題意図をはっきりと明示したことから、大多数の学生は取り組みやすかったのではないと思う。一方、確認テストの基準点を下回った学生への対処方法としては、好むと好まざるにかかわらず、「書いて覚える」ことの重要性を理解し、実践してもらう工夫が必要である。方法論よりも、辛抱強く継続的に行う覚悟が必要と考えている。

3) 改善方策

基準点を下回った学生に共通する課題は、語彙を構成する接頭辞や接尾辞などといったパーツが意識できないことが多いと思う。その点に対しては、定期試験を除き、覚える必要がある重要語彙表現を語尾や接頭辞の意味を強く意識しながら、何度も書いて覚えてもらうことを継続してもらうしかないと考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	日本語学Ⅱ 本多 真史	第2学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験問題を解く際に必要となる読解力の基盤を確立するため、問題を正確に読み、内容をきちんと理解し、自らの考えを整理し、正しく答えられる力を修得することを目標としている。授業内容は、これに沿う形で行われている。

2) 自己点検・評価

目標と授業内容は合致している。また、受講生全員(休学者を除く)が合格したことから、科目の目標は達成されたと考える。

3) 改善方策

到達目標についての問題はないと判断し、2025年度も同様の目標を設定する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義では、資料(A4冊子6枚程度を毎回配布)をもとに「参加型・実践形式」で展開した。受講者が問題文を読み(インプット)、理解し、思考して(プロセッシング)、まとめる(アウトプット)という一連の行為が円滑に行うことができるようになるための機会を設けた。受講者が問題を解いた後、教員がそれについて解説を行った。また、パワーポイントで作成した資料を毎回ユニバにあげ、復習しやすい環境を整えた。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートでは、「授業の後に復習を行ったか」の評価が低かった。日本語は外国語のように「使えない」と実感されることはないためか、「この科目は必要ない」との声も聞かれる。その認識を打ち壊すことができなかったことに加え、学生の好奇心を刺激できなかつたように思われる。

3) 改善方策

臨床の現場で必要とされる「想起>解釈>問題解決」というプロセスは、歯科医師国家試験問題を解く際に必要な読解力と通ずるものがあるなど、受講生の関心により近い内容を盛り込むようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

形成的評価の結果のみで評価した。

2) 自己点検・評価

評価方法については、問題がないと考える。

3) 改善方策

成績評価について、特筆すべき問題はないと考える。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	化学 阿部 匡聡	第2学年
--------------------	-------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

基本的な有機化合物の構造・性質・反応についての知識・概念を習得するため、①化合物の官能基による分類と性質・反応 ②異性体 ③誘起効果と共鳴効果 ④置換反応、付加反応、脱離反応、転位反応 ⑤反応進行過程での求核剤、求電子剤の働き ⑥芳香族化合物の性質・反応と脂肪族化合物との違い、を説明できることを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

目標としては、適切であると考えている。

3) 改善方策

修正・変更は特にしない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義93%，演習7%で、資料として、教科書と、教科書の内容を補充するためのプリントを用いた。適宜、レポート提出を課した。

2) 自己点検・評価

授業評価の自由記載欄に、「黒板の板書が書きやすかったです。」という記載があった。授業内容の質を維持しつつ、より平易な解説を行うよう努めてきた。適宜課した、レポート提出、問題演習は、授業内容の理解向上、復習、問題への対応力強化に有効であった。

3) 改善方策

口頭試問による双方向的要素の導入機会を一層増やし、一定の緊張感と、能動的に考える姿勢を持たせる。授業でとったノートを有効に活用して、復習するよう、意識づけをする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

中間試験（45%）と定期試験（55%）により総括的評価を行った。レポートにより形成的評価を行った。

2) 自己点検・評価

評価法としては、適切であると考えている。

3) 改善方策

評価法としては、適切であると考えている。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	生物学 前田 豊信	第2学年
--------------------	--------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師として必要な生命現象を理解するために必要な、分子生物学的知識を中心に講義を行った。これについては、一定の成果を上げることが出来たと考える。一方、遺伝子工学の現状から生命倫理について考察を行ったが、この点については不足している部分もあると考える。

2) 自己点検・評価

歯科医師として必要な生命現象を理解するために必要な、分子生物学的知識の充足確認のために、定期試験を実施した。その結果、一部の学生が再試験該当者となってしまった。そこで、全く異なる問題で構成される再試験を行い、全員が合格基準点に到達したことは、一定の評価が出来ると考える。その一方、シラバス後半で行った、生命倫理について考察については、学生の考察が深まったのか否なのかを評価に至っていない。

3) 改善方策

生命倫理について、熟成を目指す必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義時間に知識のインプットとアウトプットを行い、各問題・設問に対応できる能力を養っている。具体的には、スライドと演習問題を配付し、大学指定のサーバーに各問題の解説を開示している。
予習・復習のために、重要な語句が確認出来るWebページを用意している。講義では各知識を説明して（インプット）、例題問題解説を行う（アウトプット）ことを通して、各個人が知識の充足が図れる様にした。

2) 自己点検・評価

Webページと講義スタイルについては一定の評価を受けている。しかし、定期試験において、全受験者が合格基準点に達しなかった事は、改善の余地があることを示している。

3) 改善方策

オンライン資料の充実などを図るように努める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

唯一の評価基準である定期試験は、総合試験・CBT・国家試験に準拠する、客観試験の60題のみで評価している。このことは、生命倫理について、熟成を評価出来るものではない。

2) 自己点検・評価

定期試験における評価方法は現状で最も妥当と考えるが、生命倫理についての熟成を評価出来るものではない。

3) 改善方策

生命倫理について評価が困難であるため、新たな評価軸の構築を考える必要がある。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	基礎歯学概論Ⅱ 遊佐 淳子	第2学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

2年時の後期から3年時の履修科目となる専門基礎科目（口腔衛生学、歯科薬理学、口腔病理学、口腔生化学、生体材料・歯科材料学）を中心に、履修前の予備知識として知っておくべき概論や要点について講義している。

2) 自己点検・評価

歯科医師として身につけなければならない知識を習得する上で、専門基礎科目は特に重要となる。そのため履修前に予備知識として講義することは妥当である。授業評価で、まだ講義内容に含まれていない講義が学べたので良かったとの意見があり、有意義な講義であったと思われる。

3) 改善方策

基礎歯学概論の必要性を明確に示し、各科目講義担当者が概論であることを認識し予備知識や要点を講義する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義担当者により異なるが、講義主体でスライド投影、プリント、板書により適宜進めている。

2) 自己点検・評価

たくさんの内容を理解するために授業プリントがあったので良かったとの意見があり、プリント配布は有用であった。

3) 改善方策

複数の科目担当の講義であるため、講義スタイルがそれぞれ異なるが、学生にわかりやすいスライド作成やプリント配布を再確認する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

多肢選択方式問題による定期試験(100%)で評価し、65点以上で合格とする。再試験は65点未満の不合格者に実施した。

2) 自己点検・評価

試験問題の出題範囲は講義した内容であり、定期試験で65点以上で合格とするのは妥当である。

3) 改善方策

各科目の授業内容から出題されることを学生に周知する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科医療人間学Ⅱ 中川 敏浩	第2学年
--------------------	-------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医療人間学は、高度専門職業人としての歯科医師である前に社会人としての素養、教養および社会適応能力を高揚し、自らのホスピタリティマインドに加えて、患者中心の医療を全人的に捉えるため、身体面、心理面、社会面、倫理面の各要素を総合的かつ包括的に理解し、「歯科医療の安全・安心・信頼の文化」を醸成することにある。

2) 自己点検・評価

歯科医療人間学は、高度専門職業人としての歯科医師である前に社会人としての素養、教養および社会適応能力を高揚し、自らのホスピタリティマインドに加えて、患者中心の医療を全人的に捉えるため、身体面、心理面、社会面、倫理面の各要素を総合的かつ包括的に理解し、「歯科医療の安全・安心・信頼の文化」を醸成することにある。

3) 改善方策

態度教育は身だしなみや挨拶などビデオ撮影しているがその目的を明確にし、コミュニケーション技能はパフォーマンスのみにとらわれること能動型学習を目指す。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

態度教育は身だしなみや挨拶などビデオ撮影してフィードバックした。コミュニケーション技能は歯科用語や痛みの表現から患者とのコミュニケーションを会得した。

2) 自己点検・評価

すべてのコースで演習形式や発表形式を取り入れ、学生の自主性を最大限に発揮する方策を取り、促しや問いかけにより各人が自分自身を見つめ直すことにより「気づき」を自覚させ、自主性を促し、その時間内で完結・解決するよう努めた。

3) 改善方策

学生からは、良かった点として、視覚的な情報が入っている事がほとんどなので、イメージがしやすい医療面接の練習で改善点をしっかりと伝えてくれたことが良かったです。声の大きさとか喋り方とかが聞きやすい。改善してほしい点などはほとんど上らず満足度の高いものとなっており、今後も維持向上を目指す。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

各講義演習で行われた小テスト、視覚による評価、レポートなどの提出物による形成的評価をすべて100点満点換算して点数を算出して65点以上を合格とした。

2) 自己点検・評価

総括的評価は各ユニットごとにそれぞれの授業内容の評価と授業態度や積極性についての総合得点が合格点に達した。

3) 改善方策

各ユニット毎の評価は100点満点で行っているが評価者により最高点に格差が認められたことから次年度からは評価の統一基準を示すよう努めます。また、明らかに勉強が不足している学生には理解するまできめ細やかな対応を心がけるようにする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔解剖学 宇佐美 晶信	第2学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ヒトの歯の形態、歯列咬合および口腔周囲の解剖学的構造について知識を獲得するための講義をおこなっている。

2) 自己点検・評価

シラバスに沿った講義の進行について、否定的な意見は皆無であった。同様に「授業の目的や概要の説明はありましたか」に対しても、否定的な回答は皆無であった。「口腔外科と関連した授業であり興味が持てた」というコメントがあった。

3) 改善方策

前期の「臨床から見た口腔解剖学」や後期の「臨床関連の解剖学」など授業内容を設定して、臨床科目との関わりについても伝えていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学分野作成のプリントに従い講義をおこなっている。また、毎回の授業前に小テストをおこない前回範囲の知識の定着を確認している。

2) 自己点検・評価

「レジュメの穴埋めを減らしてもいい気がします」というコメントが有った。

3) 改善方策

事前に「穴埋めの解答」をポータルサイトで配布しているので、学生が予習をするように指導していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期、後期の定期試験の平均で65点を超えたものを合格としている。小テスト分は各期の10%の評価としている。

2) 自己点検・評価

「復習を行いましたか」に対して、約15%の学生が復習をあまりしていないことが分かる。

3) 改善方策

小テストを成績評価の10%とする評価方法を継続して、復習の習慣付けをおこなってきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔解剖学実習 宇佐美 晶信	第2学年
--------------------	-------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯や骨の形態を理解するために、前半は歯の形態を2次的に理解するためのスケッチと3次的に把握するための石膏彫刻をおこない、後半は頭蓋骨と体幹、四肢を含む全身の骨学実習をおこなっている。

2) 自己点検・評価

デモンストレーションを希望するコメントが1件見られた。

3) 改善方策

学生自身の自主性を損なわない範囲で、過保護にならないようにしながら実習説明の内容については調整していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

歯の形態を理解するために前半7回にスケッチおよび石膏彫刻をおこなっている。骨学実習では骨標本の各部位の確認をおこなっている。

2) 自己点検・評価

全項目で、評価点は全体よりも高い結果であった。

3) 改善方策

専門科目最初の実習として、苦手意識などを生じさせないようにしたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

歯の解剖における彫刻と骨学実習における該当箇所の「口腔顎顔面解剖ノート」の提出物と態度点で評価した。

2) 自己点検・評価

評価基準についての説明をおこなっているため、成績評価に関して否定的な意見はみられなかった。

3) 改善方策

提出物の管理が苦手な学生に対する配慮を検討していきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	解剖学 宇佐美 晶信	第2学年
--------------------	---------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人体の正常な形態と構造に関する知識を講義している。

2) 自己点検・評価

シラバスに沿った講義の進行について、否定的な意見は皆無であった。同様に「授業の目的や概要の説明はありましたか」に対しても、否定的な回答は皆無であった。

3) 改善方策

臨床科目とのかかわりについても伝えて、学生の学修に役立つように、今後も工夫を重ねていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学分野作成のプリントに従い講義をおこなっている。また、毎回の授業前に小テストをおこない前回範囲の知識の定着を確認している。

2) 自己点検・評価

「レジュメの穴埋めを減らしたほうが良い」というコメントがあった。

3) 改善方策

事前に「穴埋めの解答」を配布しているので、学生が予習をするように指導していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期、後期の定期試験の平均で65点を超えたものを合格としている。小テスト分は各期の10%の評価としている。

2) 自己点検・評価

「復習を行いましたか」に対して、約9割の学生が復習を実施していることが分かる。

3) 改善方策

小テストを成績評価の10%とする評価方法を継続して、復習の習慣付けをおこなっていきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	解剖学実習 宇佐美 晶信	第2学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人体を用いた解剖実習により解剖学の講義で学んだ知識を深めるだけでなく「医の倫理」や「死者への尊厳」を修得めざしている。

2) 自己点検・評価

「シラバスに沿った講義の進行」について、否定的な意見は皆無であった。同様に「授業の目的や概要の説明はありましたか」に対しても、否定的な回答は皆無であった。

3) 改善方策

学生自身の自主性を損なわない範囲で、過保護にならないようにしながら実習説明の内容については調整していきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

歯の形態を理解するために前半7回にスケッチおよび石膏彫刻をおこなっている。骨学実習では骨標本の各部位の確認をおこなっている。

2) 自己点検・評価

「ひとつの班に数人の先生がとられていると質問しようにもできない」というコメントがあった。

3) 改善方策

解剖学会において、解剖学実習は学生自身が考えながら実習を行うことが重要であるとの意見もあるので、自主性を尊重したい。教員が一極集中しないように注意しながら対応していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

各回の実習内容を次回の小テストを70%、各班が実習期間中に1回行う発表と態度点を各15%として評価を行い、総計が65点以上のものを合格としている。

2) 自己点検・評価

評価基準についての説明をおこなっているため、成績評価に関して否定的な意見はみられなかった。

3) 改善方策

必要な改良点が見いだされた場合には対応していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔組織学 安部 仁晴	第2学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『疾病を治療対象とした基礎知識を得るために、細胞と組織、人体諸器官、さらに歯と歯周組織をはじめ口腔諸器官の正常構造と微細構造を機能と結びつけ、それらの発生過程、加齢変化を理解する。』として、4つの到達目標を設定し、基本的な知識の習得と他の基礎系科目や臨床系科目と結びつけることが出来るような思考の修得を心がけ、複数の教員で分担して講義を行った。

2) 自己点検・評価

集計項目の多くは肯定的な意見であり、否定的な意見は少なかったことから、到達目標と講義内容は次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、成績評価や総合試験の結果から、到達目標に合致した講義内容であるか検証する。

3) 改善方策

集計項目の結果から、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、講義担当者間で、コアカリや国家試験基準に沿った到達目標の内容であるか、到達目標に合致した講義内容となっているか、講義担当者間で話し合い検証する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教員によって細かな教育法は異なるが、基本的に配布資料（講義プリント）の作成、予習と復習のために授業資料提示システムを使い、資料をアップロードすることを講義担当者に統一した。また、教育内容では、形態学を理解しやすくするために、写真や模式図を数多く取り入れて講義するよう心がけた。

2) 自己点検・評価

集計項目の多くは肯定的な意見であり、否定的な意見は少なく、『わかりやすい』との意見が多かったことから、教育方法は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、予習を行う学生の割合が低い点については、改善したい。

3) 改善方策

予習する学生の割合が少なかった点は、講義資料を授業資料提示システムに事前にアップロードしてある事を学生に周知し、改善する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

講義時間数に応じて、前期中間試験、前期定期試験、後期中間試験、後期定期試験の4回の記述試験を設定した。各試験では、不合格者と希望者に対して、再試験を1回行った。この4回の試験の平均をもって成績評価とした。

2) 自己点検・評価

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も79点であった。しかし、合格基準に達しなかった学生は、1名であった。この学生に対する対処として、科目選択ゼミの時間を使い、試験のフィードバックを行った。

3) 改善方策

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も高かったことから、次年度も変更する必要はないと考える。しかし、合格基準に達しなかった学生に向けて、試験のフィードバックのみならず、再度、重要事項を説明する機会を設ける。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔組織学実習 安部 仁晴	第2学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『人体と口腔諸器官における特徴と機能を理解するために、光学顕微鏡を用いて、細胞、組織の正常構造、歯と歯周組織をはじめとする口腔諸器官の正常微細構造、それらの発生過程の知識を修得する。』として、6つの到達目標を設定し、基本的な知識の習得と他の基礎系科目や臨床系科目と結びつけることが出来るような思考の修得を心がけ、複数の教員で分担して実習を行った。

2) 自己点検・評価

集計項目の多くは肯定的な意見であり、否定的な意見は少なかったことから、到達目標と実習内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、成績評価や総合試験の結果から、到達目標に合致した実習内容であるか検証する。

3) 改善方策

集計項目の結果から、到達目標と実習内容は次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、担当インストラクター間で、コアカリや国家試験基準に沿った到達目標の内容であるか、到達目標に合致した講義内容となっているか、話し合い検証する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習開始時に、その日の課題の説明（標本の顕鏡ポイント、講義内容の復習と実習内容の関連性等）を行い、学生全員が当日の課題に取り組み易くなるようにした。また、学生を少人数のグループに分け、各グループに担当インストラクターを配置することで、学生一人ひとりにきめ細やかな指導が出来るようにした。

2) 自己点検・評価

集計項目の多くは肯定的な意見であり、否定的な意見は少なく、『わかりやすかった』との意見も多く、教育方法は、次年度も概ね変更する点はないと考える。

3) 改善方策

特に改善する点はないと考えるが、自由記載欄にあるインストラクターの態度については、改善する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習内容から一般組織学と口腔組織学に分け、記述式の試験を行った。各試験では、不合格者と希望者に対して、再試験を1回行った。この2回の試験の平均点（80%）と実習課題の終了状況をリクワイアメント票（20%）とし、合わせて成績評価とした。

2) 自己点検・評価

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も89点であった。しかし、合格基準に達しなかった学生が1名いた。この学生に対する対処として、実習時間を使い、試験のフィードバックを行った。

3) 改善方策

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も高かったことから、次年度も変更する必要はないと考える。しかし、合格基準に達しなかった学生に向けて、試験のフィードバックのみならず、再度、重要事項を説明する機会を設ける。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔生理学 I 川合 宏仁	第 2 学年
--------------------	------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生命現象を営む生態の機構を説明できる、各器官の協調活動を説明できる、歯科疾患の病態生理を説明できるという到達目標を立て、定期試験や中間試験で到達度ははかっている。その結果、及第点に達した学生の多くは、生体機能とそれを営む各器官の協調、さらに歯科疾患に関係する病態生理を理解し、ある程度説明できるようになった。

2) 自己点検・評価

重要事項を説明できるようにするという到達目標では、与えられた選択肢の中から答えを選んだり、ヒントが与えられれば何とか答えられる（説明できる）という学生が大半であった。講義では基本事項の修得に努めさせているので、授業を聞いている学生はある程度の学力の向上が認められる。

3) 改善方策

基本的事項をさらに絞って重点的に学習させることでより深い内容理解につなげるようにする。毎週の課題を積み重ねることで、生理学の最終的な到達目標を達成できるように講義と課題をデザインしている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

黒板への板書やスライドを基本とし、補助教材としてプリントを配布した。また、より効率的内容を理解させるため、双方向性で、講義中に質問を行った。講義ごとの復習課題では、各講義の到達目標について記述させ、次回の講義開始時に選択問題でチェックする。講義内容について、帰宅後に資料を見直し、ある程度理解できていることを確認させるための課題を出している。

2) 自己点検・評価

学生が集中して講義に入り、講義中も折に触れて講義に追いつけるよう工夫しているものの、学習した内容について忘れてしまう学生が多く、履修すべき内容が初めてのため、説明に重点を置きがちになった。

3) 改善方策

講義中の2択問題は講義の双方向性を担保するために実施しているが、問題を当てられることにストレスを感じる学生もいるために、講義資料を一週間前に公開して、十分に予習期間をとることにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期定期試験、後期中間試験、後期定期試験の3回の試験の平均が65点以上を合格とする。3回の試験では、本試験で不合格となった学生を対象に、最高点65点の再試験を実施している。

2) 自己点検・評価

1年間で3回の試験で、各試験の不合格者に再試験を課しているため、成績不良者への配慮としても十分と考える。また、前期は定期試験、後期は中間試験と定期試験を行い、その総合成績で合否を判定するが、中間試験を入れることで、1回あたりの試験範囲が絞られるため、学生の負担軽減と集中して記憶する時間が与えられていると思う。

3) 改善方策

問題を解くために必要な思考や知識の要素を説明させ、それを試験に出題する。また、学習内容が高学年になっても記憶に残るように、実習で関連課題をこなしたり、イメージ図を描かせる課題の提出を行わせる工夫を行う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔生理学実習 川合 宏仁	第2学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

人間の顎、顔面、口腔領域を含めた生命現象の基本的な機能について全般的に理解することを目標とした。

2) 自己点検・評価

到達すべき目標については、現在の実習項目で十分な内容であると考えている。特に、授業への参加意識の高い学生には興味を深める内容の授業が提供できた。

3) 改善方策

到達目標を学生にしっかりと認識させ、レポートや実習中の質問を用いて細やかに点検する必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学生に対しては、実習内容や具体的な方法などを一通り説明をしてから実際の作業に取り掛かせる。また、理解力を高めるために、昨年度と違い、講義を追加した項目もあった。

2) 自己点検・評価

項目が多いため、説明に多くの時間を要し、注意力が散漫になる学生もいた。レポートはPCの使用を認めたグループもあったが、提出までの期間が短く、学生からの不満が多かった。

3) 改善方策

予めプリントで基本的な知識の整理をした上で実習に臨ませる。また、講義ごとにフィードバックを行い、学生に説明して理解してもらおう。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期定期試験の点数が65点以上を合格とする。本試験で不合格となった学生を対象に、最高点65点の再試験を実施している。

2) 自己点検・評価

学生の学力、学習意欲を反映した評価となっている。ただし、最終得点が65点から75点の学生について、国家試験合格のためには高学年での相当な努力が要求される。

3) 改善方策

学習内容が高学年になっても記憶に残っているように、イメージ図を描かせる課題、レポートを課し、問題を解かせる工夫をする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔生化学 I 加藤 靖正	第 2 学年
--------------------	------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

生体を構成する成分や機能について、分子レベルで理解することを目標とした。また、代謝の破たんが原因となる疾患の成因についても学修項目に加えた。

①生体を構成している主な物質の分子構造と機能、②遺伝情報の保存と発現、③代謝における酵素の働き、④糖代謝と脂肪酸代謝によるエネルギー産生機序、⑤糖新生性、脂質合成の機序、⑥代謝の破たんと疾病の成り立ち

2) 自己点検・評価

予習していない学生の割合が、36%ととなったが、前年度35%とほぼ同率で、2022年度(40.3%)よりは減少した。復習しなかった割合は13%で、前年度30%、2022年度43.8%であったことから大幅に改善された。知的好奇心については、58%が肯定的に評価しており、前年度38%から改善されたが、2022年度70.2%までは回復していなかった。

3) 改善方策

知的好奇心を高められるように、具体例を多用して講義していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

分担者により、パワーポイントを利用した講義と、板書主体で適宜プリント配布での講義者との混在であった。

2) 自己点検・評価

教員の準備、熱意工夫については、それぞれ78%、77%が肯定的で例年通りの評価であった。パワーポイントを利用した講義についての個別意見はなく、板書が早いなどの個別意見が散見された。本試験での回答個数指定を守らない学生数については、大幅に改善された。

3) 改善方策

黒板の内容をノートに取ることが困難な場合、板書内容を写真にとることを全員に許可した。テスト対策として単純記憶に頼ることが先行し、理解することが不十分な学生が一定数いた。成績向上のためには、まず理解することが必要であるとの意識改革につながるヒントの提供に一層心掛ける。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(多肢選択形式, 100点満点)にて65点以上を合格とする。追・再試験は65点以上を合格とした。再試験の評価は、65点以上を65点とし、追試験の評価は、90点以上を90点とした。本試験、追・再試験以外の試験では評価しなかった。

2) 自己点検・評価

正答率が30%に満たない問題に対しては、正解の場合はカウントし、誤答の場合は総問題数から減じる措置を講じた。また、本試験問題、追再試験問題ともに持ち帰りとし、追再試験問題については、本試合格者のうち希望者には配布した。

3) 改善方策

今後も継続していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔感染免疫学 I 玉井 利代子	第 2 学年
--------------------	---------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

口腔感染症及び全身感染症の原因となる微生物とその病原微生物に対する免疫応答に関する知識を身につける。すなわち、学生が 1) 微生物の種類とその特性を説明する、2) 病原微生物の病原性を説明する、3) 滅菌、消毒及び化学療法について説明する、4) 微生物感染に対するヒトの免疫応答を説明することが出来るようになることが到達目標である。

2) 自己点検・評価

口腔感染免疫学 I (第 2 学年) では、週 1 時間、30 週かけて口腔感染免疫学の半分の内容を教えている。口腔感染免疫学 II (第 3 学年、週 2 時間 15 週) と比較すると、試験範囲が狭いので試験結果の平均点は高く、大部分の学生が到達している。

3) 改善方策

昨年度、「到達目標「4」微生物感染に対するヒトの免疫応答を説明する」は第 3 学年にも含まれるが、進級前に春休みがあるので、第 2 学年でも「抗体」のみならず、「補体」を教えるのも良いと考えたので「補体」も試験範囲に含めた。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義形式で教科書・配布プリントを使用して履修する。講義中に学習者に質問し、それに対する応答を求めて授業の理解度を確認する。

2) 自己点検・評価

ユニパからの回答

- ・レジュメが素晴らしいです。・レジュメに初めから全て書いている。復習しやすい
- ・練習問題を増やしてほしい
- ・ほぼみんな寝てる
- ・もっと例を挙げてほしいです

3) 改善方策

配布プリントの評価は高かったが、200 ページ近く重たいので改善したい。練習問題を増やすのはページ数増につながるので 2D の練習問題増で対応する。具体例増は要望に従う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験 (100 点満点) で評価する。65 点以上を合格とする。試験問題は記述式と多肢選択方式が含まれる。定期試験後に学生全員に模範解答を配布し、学生から意見があれば対応する。

2) 自己点検・評価

定期試験後に学生全員に模範解答を配布することで、効果的な復習につなげている。上記の通り、試験問題は記述式と多肢選択方式が含まれるので、多肢選択方式が苦手でも記述式は出来る学生がいることが分かる。

3) 改善方策

知識の定着には時間がかかるので前期定期試験の再試験は行わず、後期定期試験で挽回できる方法をとっている。今年度の前期定期試験の平均点は昨年度を下回ったが、後期は上回ったので来年度も同様とする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科薬理学 I 鈴木 礼子	第 2 学年
--------------------	------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科薬理学を学修する上で土台となる薬理学総論、すなわち、薬理作用（薬力学と薬物動態学）の基本的理論の修得を目指した授業と試験を実施した。

2) 自己点検・評価

後期15回の講義で、薬理学総論、特に2学年のうちに、しっかり修得してほしい事項は伝えることができた。「学生による授業評価」の結果からも、こちらが修得してほしいことは、大部分の学生にも伝わったと考えられる。

3) 改善方策

講義の体系は現状を維持するが、授業実施の面で、より学生が歯科薬理学に親しみをもてるような実例などを盛り込むことや、学修している内容が歯科医師になる上でどのように重要なのかを伝えることなどを、更に意識していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

指定教科書の内容を、より平易に説明し、わかりやすい図などを補足した「解説プリント」と、「問題演習プリント」の2種類を配布した。授業では、「解説プリント」でインプットすべき重要知識を明示した後、「問題演習プリント」の例題で知識のアウトプットの仕方を伝えた。更に、「問題演習プリント」の例題の後ろに、その項目のポイントをまとめ、穴埋め方式で復習できるようにした。

2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」では、自由記載で「レジュメがわかりやすい」、「解説がわかりやすい」とのコメントを得た。また、教育方法に関する改善要望もなかった。従って、こちらの狙いは大部分の学生に伝わっており、教育方法を大きく変える必要はないと考えている。

3) 改善方策

今後も改訂を重ねて、よりわかりやすい資料作成や、わかりやすい授業実施に努めていく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

後期15回の科目なので、後期定期試験100%で評価し、100点満点中65点以上で合格とした。追再試験終了後、最終的に、後期定期試験受験者35名中1名が不合格となった。

2) 自己点検・評価

最終成績として、科目の平均点は83.54点 (SD: 14.74) であった。従って、成績評価の基準（試験の難易度）は妥当であったと考えている。しかしながら、同級生に比べて、極端に成績不振の学生（65点未満で不合格）が生じてしまったことは、成績評価以前の段階に改善の余地があると考えている。

3) 改善方策

早い時期から「勉強の仕方」を明示し、かつ、「過去問の正答を試験直前に丸暗記しても、理解していなければ点数には結びつかない」ことを、今まで以上に繰り返し伝えていく。また、毎回の授業に出席して、しっかり説明を聞き、疑問点はその日のうちに解決することが重要である旨も、引き続き、繰り返し強調していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	生体材料・歯科材料学 I 石田 喜紀	第 2 学年
--------------------	-----------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「歯科医師となるうえで、治療に必要な機材、材料の知識を当該科目にて学修する」ことを一般目標とし、到達目標としては、1) 歯科修復物を構成する各種の生体材料を説明できる。2) 成形加工に用いる歯科材料と器具の特性および使用法について説明できる。3) さまざまな症例に適応した歯科材料や器具が選定できる。としている。

2) 自己点検・評価

到達目標はコアカリキュラムや国家試験出題基準等を参考にし、設定している。科目の特性上、特に臨床に繋がるよう意識している。問題点は到達目標に対して、講義実習では実際に取り扱わない材料器械が多いことである。

3) 改善方策

視覚素材を多く示し、理解を助けるようにする。また、問題演習を多く取り入れることで学習の入口としたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書を基本とし、テキストの順番に合わせて講義を行う。要点はプロジェクターを活用し、視覚素材を多用することで極力図案として記憶出来るようにする。また、教科書およびレジュメにて理解を深める。各項目終了後に練習問題を配布し、各学生が自学自習後に知識の確認をさせるようにしている。

2) 自己点検・評価

問題配布は学生の学修の指標として役に立っていると思われる。レジュメのプリントも学習のまとめを促す効果があると考えている。講義担当者により評価に隔たりがあった。

3) 改善方策

齋藤講師の授業評価が高かったので、全体で話し合い良い手法を取り入れる。レジュメの形式を統一し、学生が学習しやすいようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験（上限100点）、追試験（上限100点）、再試験（上限65点）で評価する。65点以上を合格とする。必要に応じて特別試験を行うことがある。試験問題は多肢選択式とする。

2) 自己点検・評価

多肢選択式にすることで客観的評価が行えていると考えている。定期試験の問題数を多くすべきかもしれない。

3) 改善方策

担当教員による定期試験のブラッシュアップを継続して行っていく、CBTや国家試験に準じた問題でありながらより考えさせる問題を作成することができるよう努力する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	公衆衛生学 小林 美智代	第2学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

以下の項目の理解を到達目標としている
①健康、障害、疾病と死の概念 ②疾病と根拠に基づいた医療(EBM)実践の概念と応用法 ③保健医療統計の限界と有用性 ④公衆衛生的な感染症の予防対策 ⑤疾病予防や健康を保持増進する環境条件 ⑥食品衛生と栄養摂取基準 ⑦人口統計、疾病の分類、統計、生命曲線

2) 自己点検・評価

⑤⑥のように覚える事柄がはっきりしているもの、③の疫学のように答えが一つで、計算で解答が得られるものは目標に達している。
それに対し、①のように概念的で複数の選択肢から一つに絞るのが難しいもの、②のように毎年新しい概念が取り込まれていくもの ④のように、感染免疫や外科など複数の科目の知識が必要なもの、⑦のように歯科との関連が想像しにくいものは到達目標に達していない。

3) 改善方策

①と②に関しては、問題を解いて解答を理解していくことが重要であると考え。また、医師国家試験等の医学系国家試験も併せて解けるように指導していく。問題を解き、正答を理解する時間を作っていく。
④や⑦も学習すべき範囲を広げすぎないように明示した上で、医学系国家試験で出題された知識も必要量示した上で、覚えるように指導していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

2024年度授業評価集計結果から、満足度が高かった項目(80%以上)は以下の7点である。①シラバスに沿って進化したか。②授業の目的が説明があったか。③授業の準備がしっかりしていたか。④授業の工夫が感じられたか。⑤重要事項や必要性が理解できたか。⑥自らシラバスを確認したか。⑦興味が高まったか。
満足度の低かった項目は以下の3点である。⑧予習を行ったか ⑨質問はできたか ⑩復習を行ったか。

2) 自己点検・評価

2023年度授業評価集計結果も⑧～⑩に関して低かった。比較すると、2024年の評価の結果は、「復習」「教員への質問」について若干の改善が認められた。
教育方法の現状の分析から、今後の問題として講義内容の向上はもちろんのこと「予習」「復習」「教員への質問」への心理的なハードルを下げて、学生に促すことが必要だと思われる。

3) 改善方策

2024年は対策として講義資料にシラバスの内容を記載した。さらにインターネットを利用し、匿名で気軽に質問できる環境を作り、さらに講義で行った問題を携帯電話で確認できるような工夫を行った。この試みは学生にも好評であった。その結果、2023年と2024年の集計結果を比較すると、⑨と⑩は改善された。引き続き「教員への質問」と「復習」をしやすい環境を構築していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験(100%)で評価し、65点以上を合格とした。2024年度の公衆衛生学定期試験の全体の平均点は76点であった。上位25%の平均は99点、下位25%の平均は47点であった。本試験で35名中8名が65点以下で追試験となったが、ほぼ同じ難度の再試験において平均は73点であり上位25%の平均が85点、下位25%の平均が53点であった。再試験に関して一人が38点で、残念ながら不合格となった。

2) 自己点検・評価

本試験の上位25%の(9人)の平均が99点であったことからして、試験問題の内容は講義に沿ったもので、適切であったと思われる。
また、再試験においても上位25%(2人)の平均が85点であったことから、本試験で基準に達しなかった学修者も勉強時間を確保できれば十分に学習目標に達することが期待できることがわかった。

3) 改善方策

本試験で不合格になった8人のうち再試験で下位の25%(2人)以外は75点以上を得点している。定期試験前に十分な時間を取れば本試験で合格点に達することが可能だと考えられる。毎回の講義の知識の定着をはかるため、講義中に問題を解く時間を与え、その解答率をその場で公開するなど、インターネットによる技術を取り入れながら、学生の学力の向上をはかっていく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	総合演習 2 D 玉井 利代子	第 2 学年
--------------------	--------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

学年末の総合試験に合格できる総合力を身につける。具体的には、1) 物質の性質に関する原理・法則、2) 元素や化合物、生体関連物質の名称・構造・性質・反応、3) 人体の正常な形態と構造、4) 生体機能、生命現象の機序、5) 病原微生物、生体防御のメカニズムおよび感染防御手段、6) 薬理作用、薬物の投与方法と体内動態、7) 生体材料・歯科材料の組成、特性および使用法を説明できることである。

2) 自己点検・評価

到達目標に関する学生からの回答はなかった。

3) 改善方策

各科目の復習を行うための演習であるので、「学年末の総合試験に合格できる総合力を身につける」という到達目標は妥当であると思う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

問題演習を主体として、適宜、プリントやスライドを用いた視覚的素材を活用しながら進める。

2) 自己点検・評価

ユニパの回答に「2Dの講義自体をなくしてほしい。」とあった。

3) 改善方策

科目によっては、2Dの時間がないと問題演習を行わない可能性があるため、引き続き問題演習を主体とする方針で依頼する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

年度末に行う総合試験 2 D の本試験または追再試験で評価する。72.00%以上を合格とする。マークシート方式、240題 4ブロック、1ブロックにつき60分間。問題はすべて A-type (1つ選べ。) である。

2) 自己点検・評価

ユニパの回答に「総合試験をする意味がわからない。」とあった。また、本年度も学年末の総合試験に合格できる総合力を身につけられなかった学生がいた。一方、本試験の平均点は上がった。

3) 改善方策

学生間の差が広がった可能性があるため、実力試験 (評価に入らないので手を抜く学生がいる) で低調だった学生と面談する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科医療管理学 南 健太郎	第3学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医療管理の概要、歯科医師の責務、診療に関する書類、医療安全確保の説明ができる。

2) 自己点検・評価

定期試験による評価では平均点が70%以上であることから、講義や評価方法に問題はないと考える。

3) 改善方策

前期は社会歯科という科目において、法律や医療安全管理を説明していたが、学生にとっては社会歯科学と歯科医療管理学が連携している科目ということが想像できなかつた。歯科医療管理学においても懇切丁寧な説明が学生には必要と考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義はスライドで実施している。特に問題はないと考える。

2) 自己点検・評価

定期試験の平均点からも講義方法に問題はないと考える。2名ほど、紙媒体での資料が欲しいと要望があったが、少人数であることから、これまで通りユニバで資料を配布。

3) 改善方策

歯科医療管理学においても、社会歯科学の復習と考えず、新規の科目として教示する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

平均点が70%をこえているので現状に問題はない。

2) 自己点検・評価

現状で問題はない。

3) 改善方策

特になし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	社会歯科学 南 健太郎	第3学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師が歯科医療と保健指導を実施するための制度を学ぶことである。これらに関する法律の知識を講義を行う。

2) 自己点検・評価

定期試験で点検を実施している。70%以上の正答率なので講義・評価に問題はない。

3) 改善方策

学生アンケートにおいても問題がないので、次年度も現状の方式で講義を行う予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義資料はユニパにアップし、資料を読めるようにPC, タブレットの持参を許可している。講義はパワーポイントを使用している。

2) 自己点検・評価

事前にまとめ資料をユニパにて配信し、それに関して講義で解説しているため、学生からも高評価であった。

3) 改善方策

次年度も同様な教育方法で実施する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験、MCQ50問で実施している。

2) 自己点検・評価

学生の社会歯科学の成績は、歯科医療管理学と関連があり、成績評価の方法に問題はないと考える。

3) 改善方策

次年度も同様に実施していく予定である。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科医療人間学Ⅲ 中川 敏浩	第3学年
--------------------	-------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

ホスピタリティーマインドに加えて患者中心の医療を全人的に捉えるために基本的なコミュニケーション能力を習得するための演習を実践している。

2) 自己点検・評価

医療事故を題材に小グループにより、KJ法および二次元展開法を作成し、発表することにより人間性を涵養する機会を設けている。後期のOSCE課題体験演習で、4年次の共用試験に備える心構えと概要を理解出来ていると思われる。

3) 改善方策

臨床での医療面接を想定し、コミュニケーション能力の向上に努めるよう、双方向の教育を実践する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前期は、日本語の本多先生とブォイスプロの吉田先生、鈴木先生により医療面接を想定し、言語・非言語のコミュニケーションを実践することとしている。

2) 自己点検・評価

1年生、2年生で行ってきた言語・非言語のコミュニケーション能力をアップデートすることに繋がっていると思われる。学生からも良かった点として、毎回、参加型の授業形式であり、非常に受けやすかったです。患者さんとのコミュニケーションの取り方を丁寧に教えてくださったなどが挙げられ満足度の高いものとなっている。

3) 改善方策

本年度は科目担当責任者が変わり引き継ぎ過程において、講義予定が変更になったところもあり学生からはシラバスと異なる、などの意見がみられたが、新年度では今年からの担当者が継続して行うの、このようなことはないであろう。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

筆記試験
医療面接等の模擬演出のビデオ撮影

2) 自己点検・評価

全ての学生は合格基準に達しており1年、2年と継続したきた集大成となったと自負している。

3) 改善方策

臨床での体験やアドバイスを他の先生を講師として話をさせていただく機会をもうけたいと考えている

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔生理学Ⅱ 川合 宏仁	第3学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

2学年に引き続き、顎、顔面、口腔領域を含めた生命現象の基本的な機能について全般的に理解することを目標とした。

2) 自己点検・評価

全体的には、到達できていると考える。特に、授業への参加意識の高い学生には興味を深める内容の授業が提供できた。

3) 改善方策

到達目標を学生にしっかりと認識させ、到達目標の達成度をきめ細やかに点検する必要がある。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義ごとの復習課題では、各講義の到達目標について記述させ、次回の講義開始時に選択問題でチェックする。講義内容について、帰宅後に資料を見直し、ある程度理解できていることを確認させるための課題を出している。

2) 自己点検・評価

課題を出すことで、帰宅後に学習する目標ができる。試験前に集中的に学習したい学生もいるので、課題の提出を強制していない。そのため、課題を提出しない学生も多い。

3) 改善方策

講義ごとにフィードバックを行い、学生に説明して理解してもらう。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期定期試験の点数が65点以上を合格とする。本試験で不合格となった学生を対象に、最高点65点の再試験を実施している。

2) 自己点検・評価

学生の学力、学習意欲を反映した評価となっている。ただし、最終得点が65点から75点の学生について、国家試験合格のためには高学年での相当な努力が要求される。

3) 改善方策

学習内容が高学年になっても記憶に残っているように、イメージ図を描かせる課題や問題を解かせる工夫する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔生化学Ⅱ 加藤 靖正	第3学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科・口腔領域として、細胞外マトリックス分子、骨、軟骨、歯、唾液、及び齶蝕について焦点を絞り、構造と機能について学修し、主な疾患の成因についても学修することを目標とした。

①細胞外マトリックス分子の構造と機能、②硬組織の構造と機能、③血清カルシウムのホメオスタシス、④唾液・プラーク・齶蝕の分子機構、⑤細胞内情報伝達機構、⑥DNAの損傷と修復、⑦遺伝病・遺伝子病の成因、⑧生活習慣病の成因

2) 自己点検・評価

予習していない学生の割合が60%であり、前年度は49%、2022年度は37.5%と年々増加した。復習しなかった割合は29%で、前年度は36%、2022年度は32.5%であり横這いであった。知的好奇心については、68%が肯定的に評価しており、対象学生が2年次に受講した口腔生化学Ⅰの時(38%)より増加した。歯学コアカリキュラムや国家試験出題範囲に準拠した内容を中心とした講義を行った。

3) 改善方策

今後も継続していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

分担者により、パワーポイントを利用した講義と、板書主体で適宜プリント配布での講義者との混在であった。

2) 自己点検・評価

教員の準備、熱意工夫については、それぞれ78%、80%が肯定的で例年通りの評価であった。パワーポイントを利用した講義についての個別意見はなく、板書が早いなどの個別意見が散見された。本試験での回答個数指定を守らない学生数については、大幅に改善された。

3) 改善方策

黒板の内容をノートに取ることが困難な場合、板書内容を写真にとることを全員に許可している。テスト対策として単純記憶に頼ることが先行し、理解することが不十分な学生が一定数いた。成績向上のためには、まず理解することが必要であるとの意識改革につながるヒントの提供に一層心掛ける。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験（多肢選択形式、100点満点）にて65点以上を合格とした。追・再試験は65点以上を合格ととした。再試験の評価は、65点以上を65点とし、追試験の評価は、90点以上を90点とした。本試験、追・再試験以外の試験では評価しなかった。

2) 自己点検・評価

正答率が30%に満たない問題に対しては、正解の場合はカウントし、誤答の場合は総問題数から減じる措置を講じた。また、本試験問題、追再試験問題ともに持ち帰りとし、追再試験問題については、本試験合格者のうち希望者には配布した。

3) 改善方策

今後も継続していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔生化学実習 加藤 靖正	第3学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

医学的に重要な血液検査項目や遺伝子解析の知識を深めることを目的とした。
①測定機器の基本的な取り扱い、②生体構成物質の基本的な取り扱い、③測定法の原理、④核酸情報のオンラインデータベースの活用、⑤測定結果のまとめと解釈

2) 自己点検・評価

内容については、歯学コアカリキュラムや国家試験出題範囲に準拠しており。内容として適正と考えている。教員の授業準備、熱意、知的好奇心などはすべて100%が肯定的と評価しているが、教員に質問できない割合が55%に達し、前年度40%から増加した。

3) 改善方策

教員に質問できない割合が高いことについて、質問しやすい環境づくりに工夫する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実験手順については、デモ内容を動画で映写し、補足説明を行った。実習講義では、実習内容の復習と応用について知識の整理を行った。

2) 自己点検・評価

項目を厳選したことで、1項目あたりに十分な時間を設けることができた。

3) 改善方策

今後も継続していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

筆記による実習内容と関連知識を問う試験3回の平均(70%)とレポート(30%)により評価し、65点以上を合格とした。レポートは、項目ごとに配布された記入用紙に、実習中に記載し即日提出させた。記載項目がすべて網羅されていることをミニマムリクワイアメントとした。また、欠席者は、日数に応じた課題に対するレポートの提出を必須とした。

2) 自己点検・評価

試験の前に、振り返り学習の時間を設けることで知識の整理する機会を設けた。口腔生化学Ⅱの試験は多肢選択式で行ったが、実習試験は筆記試験形式を採用した。

3) 改善方策

今後も継続していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔病理学 遊佐 淳子	第3学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

疾病を総括的に理解するために病理学総論を講義し、それに引き続き歯科臨床における疾病を理解するために、病理学各論（口腔病理学）を講義している。

2) 自己点検・評価

口腔病理学は臨床歯学に深く関連するので、臨床歯学を学ぶ前には口腔病理学を充分理解している必要がある。そのために、口腔病理学を学ぶ前には病理学総論として疾病を総括的に講義し、それらを理解した後に口腔領域の疾患を講義することで、より理解度を高めることができると考える。

3) 改善方策

病理学総論を理解できたことを確認し、その後、病理学各論（口腔病理学）の講義を行う。理解不十分の学生に対しては科目選択ゼミなどで復習を行う。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

スライド投影を用いた説明を主体とした講義を行っている。また、講義プリントを配布している。

2) 自己点検・評価

授業評価において、プリントが見やすく、まとまったプリントでわかりやすかったとの意見があった。一方、授業に關しては早すぎてプリントの穴埋めが間に合わないとの意見もあった。プリント配布は有用であったと考える。

3) 改善方策

スライドを進ませるときは一言かけるなどして学生の状況を把握し講義を進めるようにする。また、講義プリントを改良し、学生が記載する量を改善する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期定期試験及び後期に確認試験と定期試験の各試験において65点以上で合格とする。最終評価は3回の平均点としている。今年度はカリキュラムの変更により前期1コマ、後期3コマであったため、病理学総論終了後に確認試験を行った。

2) 自己点検・評価

前期定期試験と後期確認試験は病理学総論、後期定期試験は病理学各論が範囲であるため、それぞれが65点以上で合格とするのは妥当である。

3) 改善方策

通年科目であるため、前期試験範囲も後期定期試験後の再試験時に行うことになるため、病理学総論終了後の試験において65点未満の不合格者に対して総論の範囲の再試験を行い、病理学総論を理解させる。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔病理学実習 遊佐 淳子	第3学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

顎口腔領域の病変の病理組織診断に必要な基礎知識を得るために、諸病変の病理組織像を理解し、それを説明できるようになるための実習を行っている。実習前半では病理学総論で学んだ各病変を緒臓器において観察し、後半では病理学各論で学んだ顎口腔領域の病変の病理組織像を観察している。

2) 自己点検・評価

座学と同様に、病理学総論と病理学各論に分けて実習を行うことで、講義で説明された病変がどのような病理組織像を示すかを学ぶことができ、理解度を高めることができる。

3) 改善方策

実習時に座学との関連性をより明確に示しながら、実習を進めるようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

病変部画像が印刷されたスケッチ用紙を配布し、その画像を用いて病理組織像の説明を書いたレポートを作成する。レポート作成のために、最初にスライド投影による説明を行っている。また、レポート作成で説明すべき内容をまとめたプリントを配布している。

2) 自己点検・評価

授業評価において説明がわかりやすかったとの意見があった。プリントを配布し、レポート作成前に説明を行ったことが良かったと思われる。実習最後の総復習で大事なポイントをまとめた事が良かったとの意見があった。レポート作成前に説明をしかつプリント配布をすることは良かったと思われる。

3) 改善方策

よりわかりやすく理解しやすいように、スライドや配布プリントを改良し作成する。また、重要なことを繰り返し講義し、理解度を高められるようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習試験（病理学30%、口腔病理学50%）に課題レポート（20%）を加えて最終評価とし、65点以上を合格とする。実習試験は画像をスライド投影して行っている。

2) 自己点検・評価

スライド投影により試験を行うことはCBT対策のためにも妥当であると考えている。CBTや国試において病理組織像は非常に重要な内容であり、65点以上で合格とするのは妥当である。

3) 改善方策

鮮明な画像によるスライド作成をする。また、座席によりスライドの見え方に差があることを考慮し、スライド投影による試験だけでなく、画像を印刷した紙媒体での試験を行う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔感染免疫学Ⅱ 玉井 利代子	第3学年
--------------------	--------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

- 1) 微生物感染に対する免疫応答を説明する。
- 2) 免疫応答に関係する細胞性因子を説明する。
- 3) 免疫応答に関係する液性因子を説明する。
- 4) 齲蝕と歯周病の原因菌を説明する。
- 5) 齲蝕と歯周病の起こるメカニズムを説明する。

2) 自己点検・評価

口腔感染免疫学Ⅱ（第3学年）では、週2時間、15週かけて主に免疫学、口腔微生物学を教えている。口腔感染免疫学Ⅰ（第2学年、週1時間30週）と比較すると、半分の期間で終わらせているが2年目でもあるので、大部分の学生が目標に到達している。

3) 改善方策

免疫学は、微生物学のみならず、解剖学、組織学、生理学、および生化学の知識が必要なので今後も第3学年で免疫学の大部分を教える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義形式で教科書・配布プリントを使用して履修する。講義中に、学習者に質問し、それに対する応答を求めて授業の理解度を確認する。

2) 自己点検・評価

ユニパからの回答
・わかりやすく、聞き取りやすく、詳細に解説していただいたので、理解しやすく、また、質問にも快く受けていただき、知識の定着に役立ちました。・講義に熱量があった。・すごく分かりやすい授業だった。・事前に資料をユニパ上にアップして欲しいです。

3) 改善方策

今年度は講義前にプリントを配ったが、来年度は4月に一括して配布するので、事前に資料をユニパ上にアップする必要はなくなる予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験（50点）及び中間試験（50点）で評価する。65点以上を合格とする。定期試験及び中間試験の試験問題はどちらも記述式と多肢選択方式が含まれる。定期試験後に学生全員に模範解答を配布し、学生から意見があれば対応する。

2) 自己点検・評価

知識の定着には時間がかかるが、週2時間15週で終わらせるので、中間試験によって振り返ってもらおう。試験後に学生全員に模範解答を配布することで、効果的な復習につなげている。

3) 改善方策

今年度は講義前にプリントを配ったが、来年度は4月に一括して配布するので、自分のペースで学習を進めることが可能と考えられる。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔感染免疫学実習 玉井 利代子	第3学年
--------------------	---------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

①細菌と真菌の取り扱いに関する手技を説明できる。②細菌と真菌の基本的な形態を説明する。③化学療法の原理を説明する。④齲蝕と歯周病の原因菌の性状を説明する。⑤ヒトの生体防御のメカニズムを説明する。以上の到達目標に向けて実習し、前期後期に分けて実習筆記試験を行っている。

2) 自己点検・評価

上記①、②および④はグラム染色法とコロニー観察、③はディスク法（抗菌薬感受性試験）、⑤はゲル内沈降法を用いて説明している。試験結果は概ね高得点であるので、大部分の学生が到達している。

3) 改善方策

口腔感染免疫学Ⅰ・Ⅱで、微生物学、免疫学、口腔微生物学の知識が身につけている、またはこれから身につけるので、細菌と真菌の取り扱いに関する手技を修得する過程で知識の定着がより強くなる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習の内容に関する講義を行ってから、実習テキストに従って実習を行っていく。原則として、当日の実習結果を指定されたレポート形式で記載し、次回の実習時に提出する。実習は3年生対象だが、内容は2年生の授業に含まれる項目が多いので、ある程度思い出すように講義を行っている。また、実習筆記試験を2回、実技試験を1回行っている。

2) 自己点検・評価

ユニパからの回答
・口腔感染免疫学と同様です。 ・解説講義と実技の両方があることで理解しやすかった。
・事前に資料をユニパ上にアップして欲しいです。

3) 改善方策

今年度は講義前にプリントを配ったが、来年度は4月に一括して配布するので、事前に資料をユニパ上にアップする必要はなくなる予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

筆記試験と実技試験の成績（40点）、提出されたレポートの採点結果（50点）、出席（出席率100%で10点）で評価する。65点以上を合格とする。筆記試験及び実習試験終了後、学生全員を対象に解説を行う。レポートは、採点後に記載内容についての講評を学生全員に対して行う。学生から意見があれば対応する。レポート提出がなかった場合は不可とする。

2) 自己点検・評価

レポート提出によってある程度の点数を確保できるのは、出席必須の実習科目においては良い点だと思う。

3) 改善方策

筆記試験の成績が悪かった学生に対しては補講を行う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科薬理学Ⅱ 柴田 達也	第3学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

全身疾患（神経系、循環器系、呼吸器系、消化器系、血液系、内分泌系、代謝系、免疫系、悪性腫瘍）の治療に用いる薬物の特徴ならびに歯科医療現場で使用頻度が高い薬物（局所麻酔薬、抗炎症薬、鎮痛薬、抗感染症薬、唾液腺作用薬、神経疾患治療薬、消毒薬）の特徴を説明できることが到達目標である。

2) 自己点検・評価

到達目標にあげた項目はすべて講義した。

3) 改善方策

CBTや歯科医師国家試験で出題される内容は網羅しているので、現状を維持する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義項目の内容に相当するプリントを配布し、スライドを提示して講義している。

2) 自己点検・評価

授業評価アンケートの以下の項目、シラバスに沿った進行、授業目的や概要の説明、教員の準備状況、熱意や工夫、知的好奇心の刺激、重要項目の理解については回答者39名中、どちらかといえばを含めて36、7名が、肯定的評価であった。一方、質問できないことがあったかの問いに対して、どちらかといえばを含めて23名があったと回答している。自由記載欄にも、質問しづらい雰囲気がある、との回答があった。

3) 改善方策

質問のしにくさを学生が感じているのは、改善が必要である。他人からどうみられているか、ということであり、まずはまわりの教員や学生と話して改善の糸口をみつきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

中間試験（50点）と定期試験（50点）を合計して100点として65点以上を合格としている。定期試験欠席者には追試験を行い、最高点は80点、再試験該当者には再試験を行い最高点を65点として評価している。

2) 自己点検・評価

2023年度は中間試験85.0点定期試験80.1点で総合成績は82.6点であった。2024年度は中間試験85.6点定期試験77.0点で総合成績は81.3点であり、前年度とほぼ同様の結果で、難易度は適切であったと考えられる。

3) 改善方策

これまでは中間試験の得点は定期試験の得点より高かったが、少数ながら中間試験より定期試験の得点が高い学生が現れている。中間試験40点定期試験80点の場合、平均は60点となり不合格だが中間試験は前期前半の講義内容からの出題であり、定期試験はすべての講義内容から出題することを考えると、定期試験の得点のほうが高い場合はそちらだけで評価する方式に改めたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科薬理学実習 鈴木 礼子	第3学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

動物愛護の3つのRに鑑みて、実際の患者データや、多数の実験動物の犠牲の元に蓄積された実験データをPC上で再現できるシミュレーション、及び、過去に骨粗鬆症モデル動物から採取した標本のデジタルデータを採用した実習を実施した。それによって、歯学生にとって重要な、薬物動態、薬物相互作用、循環器系に作用する薬物、硬組織の薬理について、客観的データと知識を統合し、論理的に考える姿勢を修得することを目指した。

2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」の結果から、概ね、学生にとっても、歯科薬理学の座学で学んだ知識の理解を深める一助となったようである。従って、到達目標は概ね達成でき、実習の方向性として妥当であったと考えられる。

3) 改善方策

現状でも、歯科医師国家試験合格を目指す学生にとって有意義な実習となっていると考えられるので、実習項目自体は大きく変えずに、実習の導入ガイダンス（目的説明）において、学生の興味・関心を引き出せるよう、実習で取り扱う実験の意義・目的をより明確に説明するようにする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

項目ごとに、(1)導入講義（実習に関わる基礎的な知識の確認）、(2)実習課題の実施（PCシミュレーションまたは標本データ解析）、(3)問題演習（実習に関連する歯科医師国家試験問題等）のセットで実施した。実習課題実施においては、各人にデータを掲載した紙資料を配布し、そのデータを元に解析させた。更に、提出課題の正答は、当日中にポータルサイト上で確認できるようにした。

2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」では、概ね、「ポイントがまとまっていて、わかりやすかった」との評価であった。従って、たとえ机上の演習に近い実習形態であっても、目的や意義をしっかりと説明できれば、学生の学修意欲の向上や、理解を深めることに有用であることを示せたと考えている。ただし、あくまで実習なので、不明点の解決（教員への質問）も含め、学生が主体的に取り組むことが重要である旨、もう少し強調するべきであった。

3) 改善方策

歯科医師国家試験の傾向や、世間の歯科医療に対するニーズの動向をふまえた上で、なぜ、この実習が必要なのか、また、この実習から修得して欲しいことは何なのかを、より明確に提示していく。また、不明な点があれば、実習時間内に、自ら教員に質問して解決するよう、事前に説明するようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実習内容に関する筆記試験(60%)と提出課題(40%)の合計で、100点満点中65点以上で合格とした。なお、提出課題は、不備があった場合は差し戻してやり直させ、それが期日までに提出された場合は、満点とした。

2) 自己点検・評価

提出課題点が40%分あることにより、筆記試験の再試験を実施することなく、全員合格に至った。このことは、課題にきちんと取り組んでいるが、理解・アウトプットするのに少し時間がかかりがちな学生の、日頃の努力を評価できるという点では長所だと考えている。反面、既に提出課題点が蓄積した時期に筆記試験を行う都合上、最初から、試験勉強に身が入らないような学生も数名出てしまったのは、短所である。

3) 改善方策

実習なので、課題にきちんと取り組んでいるが、理解するのに少し時間がかかりがちな学生の、日頃の努力を評価できるという長所は、このまま生かしたい。一方、課題点があることによって、学修が疎かになりがちな学生に対しては、毎回の実習や講義に真剣に取り組み続けた学生が、結局は、最低年限ストレートで歯科医師国家試験に合格するという厳然たる事実を伝えて、意識向上を指導していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	生体材料・歯科材料学Ⅱ 石田 喜紀	第3学年
--------------------	----------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「歯科医師となるうえで、治療に必要な機材、材料の知識を当該科目にて学修する」ことを一般目標とし、到達目標としては、1) 歯科修復物を構成する各種の生体材料を説明できる。2) 成形加工に用いる歯科材料と器具の特性および使用法について説明できる。3) さまざまな症例に適応した歯科材料や器具が選定できる。としている。

2) 自己点検・評価

到達目標はコアカリキュラムや国家試験出題基準等を参考にし、設定している。科目の特性上、特に臨床に繋がるよう意識している。問題点は到達目標に対して、講義実習では実際に取り扱わない材料器械が多いことである。

3) 改善方策

視覚素材を多く示し、理解を助けるようにする。また、問題演習を多く取り入れることで学習の入口としたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書を基本とし、テキストの順番に合わせて講義を行う。要点はプロジェクターを活用し、視覚素材を多用することで極力図案として記憶出来るようにする。また、教科書およびレジュメにて理解を深める。各項目終了後に練習問題を配布し、各学生が自学自習後に知識の確認をさせるようにしている。

2) 自己点検・評価

問題配布は学生の学修の指標として役に立っていると思われる。レジュメのプリントも学習のまとめを促す効果があると考えている。講義担当者により評価に隔たりがあった。

3) 改善方策

齋藤講師の授業評価が高かったので、全体で話し合い良い手法を取り入れる。レジュメの形式を統一し、学生が学習しやすいようにする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験（上限100点）、追試験（上限100点）、再試験（上限65点）で評価する。65点以上を合格とする。必要に応じて特別試験を行うことがある。試験問題は多肢選択式とする。

2) 自己点検・評価

多肢選択式にすることで客観的評価が行えていると考えている。定期試験の問題数を多くすべきかもしれない。

3) 改善方策

担当教員による定期試験のブラッシュアップを継続して行っていく、CBTや国家試験に準じた問題でありながらより考えさせる問題を作成することができるよう努力する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生体材料・歯科材料学実習	第3学年
(記載者)	石田 喜紀	

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

各種歯科材料および器械の特性と操作法を理解するために、それらの操作法を実習書や動画を用いて説明し、実際に取扱いを経験し、正しく操作するために特性を理解することを目的とした。多くの学生が目標に対して良い結果を得られたと思われる。十分な準備の有無や理解度などにより学生ごとの実習の進捗に差が出た。

2) 自己点検・評価

実習の工程ごとのチェック項目を指定することで、それらの重要度が理解できたのではないかと考える。問題点は学生の特性により進捗状況に差が出ることである。

3) 改善方策

工程が早く終了した学生さんには口頭試問をする、または基準を少し下げてもその分の時間でPBLを導入しても良いかもしれない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

上記目標に対して、実技は各段階でインストラクターがチェックを行い、製作物の提出およびデータの提出をもって実習の完了とし、実技試験を行った。また、材料の性質の理解については動画や実習書の内容を各工程で説明を行った。到達目標をさらに細かく「実習の目標」として設定し、それらについて数回の小試験および最終試験を行った。

2) 自己点検・評価

動画については繰り返し確認できるので良い結果を生んでいると考えている。問題点としては、実習の内容が自分の将来（臨床）と結びつきにくく、理解が限定的な可能性があることである。

3) 改善方策

次週内容に対する理解を深め記憶を定着させるために、実習の内容と臨床をリンクさせるようなシナリオを作成し、PBLを行い、小試験を毎回行いそれらをリンクさせる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

①実習の各項目に対するチェック、作品の提出および作品の評価(40%)、②小試験(20%)、③総合試験と実技試験(40%)により評価する。①+②+③の合計で65点以上を合格とする。

2) 自己点検・評価

実習の実技を各行程でチェックすることでその工程の重要度が理解でき、また、その場限りの理解にとどまらずMCQによる小テストにより理解の定着を促し、最終的なテスト（実技と筆記）を行うことでさらなる記憶の定着をさせることができると考えている。より理解を深め、記憶を定着させるためにPBL等を導入し、レポート提出も考えるべきかもしれない。

3) 改善方策

小試験を毎回数問づつ行い、学習の習慣付けを促す。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔衛生学 廣瀬 公治	第3学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師法第1条にある歯科医師は公衆衛生の向上・増進に寄与しもって国民の健康な生活を確保するものとする任務を負う。そのための基盤的知識である公衆衛生学、口腔衛生学及び予防歯科学を学ぶことで地域保健ならびに予防歯科臨床を根拠に基づき適切に対応できる基礎を修得する到達目標を掲げている。

2) 自己点検・評価

到達目標は、モデルコアカリキュラムと歯科医師国家試験出題基準の項目と整合性があるものとして評価する。

3) 改善方策

本年度で退職するが、後任者には当職の良いところは取り入れ、悪いところはオリジナリティーのあるスタイルを構築していただきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義のアウトラインを資料をもとに講義を実施、さらに講義後半では問題演習を行い知識の定着を図っている。

2) 自己点検・評価

配布講義資料は学生からの評価も高く、今後も継続実施してほしい。

3) 改善方策

現状維持。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験が65点以上を合格としている。なお、追試験受験者はその素点を評価点とし、再試験受験者の評価点は65以上を取得した場合、65点として評価している。

2) 自己点検・評価

MCQの形式で、問題は科目担当者間でブラッシュアップをし、客観性の高い問題として試験を実施していることは評価できる。

3) 改善方策

今後もこの状況を継続する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔衛生学実習 廣瀬 公治	第3学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

公衆衛生で重要な環境衛生について、自ら測定し評価できること、予防歯科臨床で多用されるフッ化物応用、シーラント処置、齲蝕活動性試験の基本的な手技を修得することを到達目標としている。

2) 自己点検・評価

到達目標は、モデルコアカリキュラムと歯科医師国家試験出題基準の項目と整合性があるものとして評価する。

3) 改善方策

今後も継続してほしい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習前半は示説を行い、後半で実際に学生自ら実習を行っている。

2) 自己点検・評価

視覚素材を多用した示説後の実技実施は、学生の実習遂行を円滑にかつ理解促進に有用であり評価する。

3) 改善方策

現状維持。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

出席点10%、レポート点20%、効果測定点70%の合計65%以上の点数取得を合格としている。

2) 自己点検・評価

例年、ほぼ全員が無欠席でありレポート提出も完遂していることは高く評価できる。一部効果測定で得点不足の学生が見られるが、再効果測定を施行し知識の定着を促していることは評価する。

3) 改善方策

今後もこの状況を継続する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	保存修復学 I 山田 嘉重	第 3 学年
--------------------	------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

齶蝕、非齶蝕性硬組織疾患による実質欠損に対して適切に治療を行うための基礎知識を身に着けることを一般目標とした。保存修復学 1 での到達目標としては、齶蝕、非齶蝕性の硬組織疾患の違いを認識し、それぞれの病因と病態を説明できるようにすること。さらにそれぞれの治療法を手順を追って説明できることを目標とし、その目標に沿った授業を行った。

2) 自己点検・評価

今年度の講義で、次年度の基礎実習の準備を含む直接修復処置に対して基礎となる知識を持たせることができたと思われる。講義の内容をしっかりと理解できている学生が多かった半面、十分な知識の定着ができなかった学生もおり、学習内容の到達度に差が生じてしまった。

3) 改善方策

可能な限り多くの学生が到達目標に達することができるよう授業内容の改善を常に行っていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義はスライドおよびスライドに沿った配布資料を使用した。講義内容は指定教科書である保存修復学 2 1 および参考教科書である保存修復学の両教科書からとしている。また配布プリントは講義内容のうち最重要な箇所を中心として作成している。学生には授業後当日または遅くてもその週のうちに必ず復習をすること。その際に講義プリントだけでなく、教科書を併用して復習することを毎回指示していた。

2) 自己点検・評価

教科書に沿って授業を進めたことから、教科書に記載されている内容は後日自分で復習する際に理解し易くなったものと思われる。しかし問題点としては、講義中で配布した資料を基に多くの学生が勉強をおこなっており、講義資料がある程度の勉強のツールとして効果があったものと思われる。しかし、配布資料に頼りすぎる傾向が強く、講義内容を教科書で復習する学生が少なかったものと思われる。

3) 改善方策

学生に教科書の多くの内容を理解してもらおうと講義を進めていた。そのため講義で理解または覚える内容が多くなってしまい、十分に理解できなかった学生が少なくなかったものと思われる。そのため可能な限り講義内容をシンプルにする。講義の進め方、話し方のスピードをゆっくり行い学生の理解度が向上するよう心がける。次回の講義開始時に前回の講義が理解できていたかの確認試験を行うことも検討する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績は定期試験を行い、65点未満の学生に対しては再試験を行い評価した。

2) 自己点検・評価

本年は定期試験、再試験のみであった。しかしほとんどの学生が再試験で合格点を取得したことから今回の試験による評価法は適正であったものと考えている。

3) 改善方策

現状は評価法を変更する予定はないが、将来的には授業初めに確認小テストを行ったり、授業態度を評価するなど検討していく事を検討していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	冠橋義歯補綴学 I 羽鳥 弘毅	第3学年
--------------------	--------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために教科書、教科書をまとめた講義資料（講義に先立ちユニパに掲示）、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。この際「一般目標」の内容を反映させて講義を行った。本科目は冠橋義歯補綴学の必修～基礎内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容が深く理解されるよう配慮している。

2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。アンケート結果より、「到達目標」は「可もなく不可もない状態」と自己点検します。

3) 改善方策

「到達目標」で高評価を得られるよう、「シラバスの記載」や「教科書の学習の目標」に沿って丁寧に講義を行うことに取り組みます。授業に先立ち「講義資料」を確実にユニパに掲示する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書、教科書をまとめた講義資料（講義に先立ちユニパに掲示）に基づいて講義を行った。必要に応じ、症例写真も取り込むことで視覚的に理解が進むよう配慮している。

2) 自己点検・評価

「教育を受け知的好奇心が刺激されたり、興味が高まりましたか。」では「そう思う（56%）」であったため教育方法の方向性は正しかったと推察されるがもう少し評価が向上するよう取り組みたい。「教員の熱意や授業の工夫は感じられましたか。」では「そう思う（58%）」であった。今後は熱意と工夫も伝えられるよう努力したい。

3) 改善方策

「授業資料」はしっかりとしていたために今後の資料作成は年度更新ごとに国家試験などの出題内容を追加することにより教育方法を改善していきたい。具体的には穴埋め式or1問1答式の演習問題、MCQ式の演習問題を作成していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

後期の定期試験において点数が65点以上を合格とする。点数が65点未満の場合には再試験を行う。点数が65点未満の再試験該当者は、再試験の点数が65点以上でも65点の採点結果とする。

2) 自己点検・評価

長所は定期試験での不合格者がいないことである。問題点は採点結果が低い学生が一定の割合で存在することである。”想起→解釈⇒問題解決”のどこかで情報を整理仕切れていない学生が存在することと判断します。授業の進め方なども含めて改善する必要があります。

3) 改善方策

試験問題の正答（率）や識別係数などを判断材料として、授業資料と試験問題のブラッシュアップを行う予定です。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	有床義歯補綴学 I 高津 匡樹	第 3 学年
--------------------	--------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

令和5年版歯科医師国家試験出題基準、ならびに令和4年度改訂版歯学教育モデルコアカリキュラムに準拠して到達目標を設定した。授業はシラバスの記載に沿って行うとともに、項目ごとの到達目標や目的を提示しながら行った。中間試験と定期試験は、授業で教えた内容から出題されていることを確認して行った。

2) 自己点検・評価

本年度は3年前期唯一の臨床系科目となったため、臨床系科目における本科目の位置づけや、関連する内容については、例年以上に詳しく説明を行った。また、3年生での講義なので、国家試験よりもCBTを意識して、スライドや配付資料の修正を一部行ったが、まだまだ不十分ではある。

3) 改善方策

学生により理解してもらえる講義となるよう、スライドや配付資料の修正を行ったが、本年度は4年生の授業と並行して行われたこともあり、改善はまだまだ不十分である。如何にして学生の理解を深めるかを念頭に、次年度以降も修正をはかっていく予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

担当責任者を含め、3名の教員が講義を担当した。いずれも講義プリントを配布し、スライドと教科書を用いた講義中心の授業を行った。1限目の授業の最初に、前週の講義内容に対する小テストとその解説を行った。また、前期途中の理解度を確認するため、中間試験を行った。

2) 自己点検・評価

講義資料は3名の教員が共有することで、一貫性を保つことができた。また、不足部分は互いに補足し合うことができた。本年度は3コマ連続した講義であったため、時間の調整が少し難しかったと感じた。穴埋めの配付資料の学習効果に疑問はあるものの、これに代わる効果的な方法が現状では見当たらないので、次年度は内容の修正は加えるが、方法の変更は行わない。

3) 改善方策

双方向性の要素を高めるため、講義中の学生への質問を増やすことを検討しているが、学生の反応をみながら実施する予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価は中間試験40%、定期試験60%とし、この評価で65点に到達しなかった学生を対象に再試験を行った。各試験の平均点は、中間試験76.4点、定期試験本試験77.8点、再試験73.3点で、最終評価の平均は79.1%（いずれも加点なし）で、不合格者は1名であった。

2) 自己点検・評価

試験の結果をみると、授業内容と試験内容の整合性はとれていると考える。試験問題は前年度までとは内容や形式を一部変更したが、学生には事前に説明していたので混乱はなかった。評価方法については、シラバスに記載し、授業中に説明しているにもかかわらず、定期試験後に数名の学生から問合せがあった。他の多くの科目と異なるためと考える。

3) 改善方策

試験問題については、色々な形式の問題を試して行く予定である。次年度は中間試験を行わず、定期試験のみの評価とする。ただし、定期試験の結果をみて、学習効果や一発勝負の危険性など中間試験の有効性が示されれば、再開することを検討する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	有床義歯補綴学Ⅰ実習 高津 匡樹	第3学年
--------------------	---------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

国家試験やCBTへの対応を念頭に、実習内容をもとにして到達目標を設定している。また、実習内容は、自ら義歯を製作することで、講義内容への理解を深めるとともに、基本的な技術の習得することを目的としている。

2) 自己点検・評価

本年度は3年前期の実施となり、臨床系科目の知識が乏しい中の実習となった。全部床義歯の製作過程は非常に多いため、全過程を実習で行うのは時間的に困難である。特に、印象採得や咬合採得といったチェアサイドでの操作は非常に重要ではあるが、設備的な都合もあり行っていない。

3) 改善方策

学生からの指摘コメントはなかったが、一部の内容が現在の臨床から乖離している部分があるので、次年度の実習では変更する予定である。また、基礎棟実習室の使用、実習時間削減により、次年度の実習内容が大幅に制限されるので、その内容についても簡単に説明することで対応する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

小グループごとに教員を固定して、少人数制の指導を行っている。新しい項目に進むときは、中グループごとにデモを行っている。実習の最初に指定範囲の小テストを行っている。

2) 自己点検・評価

小グループごとの指導のため、丁寧な指導が可能となっている。ただし、班により進捗が異なる点は仕方ないと考えている。

3) 改善方策

次年度も同様の指導体制とするが、グループごとに指導内容が異なるように、事前に打ち合わせを行っているが、次年度はこれを徹底することで改善を図る。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実技試験40%、製作物40%、実習ごとの小テスト10%、履修態度10%で評価している。製作物は個人の技能の他に指導教員の影響が含まれるので、配点が突出しないよう設定している。教員への依存が高い学生や欠席が多い学生は履修態度で減点している。また、目的の1つである講義内容への理解を深めるため、毎回小テストを行っている。

2) 自己点検・評価

各項目の平均点は、実技試験73.8点、製作物72.6点、小テスト84.9点、履修態度94.6点で、評価点は76.5点であった。1名不合格。不合格の学生は、欠席が多く、小テストの点数が低いことが影響していた。

3) 改善方策

評価については妥当と考える。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔外科 I 金 秀樹	第 3 学年
--------------------	----------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯学教育モデルコア・カリキュラムに則して顎・口腔領域の疾患に罹患した患者の健康維持・増進を図るために、1) 手術総論、小手術の知識、2) 症性疾患、3) 腔粘膜疾患、4) 血液疾患、5) 損傷、6) 全身疾患と口腔病態（口腔・顔面に症状を現す全身疾患）の基礎的および臨床的な知識を習得するために4名の教員で分担のもときめ細かくプリント、動画等を用いて講義を行っている。

2) 自己点検・評価

ある一定の教育目標は達成していると考ええる。

3) 改善方策

一定の目標は達成していると考ええるが、さらに学生がより理解を深められるようさらに工夫していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各到達目標に対してプリント配布、PCを用いPCでも講義の際には学生の理解力を高めるために動画などを用いて解説を行っている。

2) 自己点検・評価

ある程度充実した教育効果が得られているものと判断する。

3) 改善方策

一定の目標は達成していると考ええるが、さらに学生がより理解を深められるようさらに工夫していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

講義終了後、講義内容についてMCQおよび記述式試験を実施し理解度を評価する。再試験は65点未満の不合格者を実施する。最終評価は本試験、追・再試験の全平均点で65点以上を合格とする。

2) 自己点検・評価

概ね問題ないと考ええる。

3) 改善方策

現段階では改善の必要性なし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔内科学 高田 訓	第3学年
--------------------	---------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

2023年の到達目標と同様、シラバスに記載された到達目標および「臨床との関連性を理解するための広い概念を知ること」を目標に加え授業を実施した。
非常勤講師の臨床的な講義を取り入れた。

2) 自己点検・評価

口腔内科学の教科書に沿って、具体的な到達目標に即した授業を行うことができた。

3) 改善方策

口腔内科学の教科書を熟知させ、臨床に直結させる必要があるが、改善対策は数年間の学力をみて判断する。
積極的な非常勤講師との交流をきっかけにモチベーションを上げたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前期・後期とも教科書を用いて、スライドとプリント媒体で講義展開し、写真媒体と活字で臨床的な概念を講義した。

2) 自己点検・評価

国家試験出題基準に沿った教科書により、有意義な授業を進めることができた。
重要点を提示することで、学習しやすくなり成績の上昇がみられた。

3) 改善方策

昨年から通じて、ほぼ、予定通りなので、現状このまま進める予定である。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期・後期ともに授業内容の確認を主体とし、定期試験で行った。
記述問題を充実させ、3Dは評価に加えなかった。

2) 自己点検・評価

総括的かつ重要項目については十分に正しい評価ができた。

3) 改善方策

教科書を用い、試験後にフィードバックしやすくする。
昨年からの改善を継続し、このまま進める予定。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科放射線学 I 原田 卓哉	第 3 学年
--------------------	-------------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバス記載内容通りに実施できていると理解している。

2) 自己点検・評価

担当者を換えてほしい。スライドで授業してほしいという意見が散見された。

3) 改善方策

担当者の交代は難しい。スライドを作るのは難しいので少しずつ進めていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

板書およびスライドを利用している。プリントを配布して、授業内容をまとめるように指導している。

2) 自己点検・評価

授業中は質問を受け付けるとあらかじめ述べているのにこの授業で国試に受かるのか不安です。問題対応力が身に付かず、これで国家試験に対応出来るのかは甚だ疑問である。何が悪いのか言わないのでどう改善したらいいのかわからない。
スライドとレジュメの作成が必要と思われた。

3) 改善方策

スライドとレジュメの作成を少しずつ進めていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

多肢選択式の筆記試験とした定期試験で評価している。

2) 自己点検・評価

点数評価のため客観性があると考ええる。
特に問題はない。

3) 改善方策

特に問題はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	高齢者歯科学 I 鈴木 史彦	第3学年
--------------------	-------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者歯科学 I では多職種連携を踏まえた歯科訪問診療・在宅歯科医療を安全に実施するために、多職種協働のしくみや高齢者に必要な口腔健康管理に関する知識を習得することを目的としている。主な到達目標は、老化に伴う心身および口腔の加齢変化、高齢者に多くみられる全身疾患と口腔疾患、歯科訪問診療、介護保険、急性期・慢性期・終末期での歯科の役割について学習する。

2) 自己点検・評価

シラバスの内容に沿って授業を実施した。長所は授業の開始時に「今回の重要3項目」を提示することで、その回で学習すべき内容のコアとなる部部を明確にしたことである。問題点は、項目によっては内容が多い点である。

3) 改善方策

現在の授業方式はかなり確立されたものと考えている。重要3項目が適切なものであるかどうか、過去5年間の歯科医師国家試験出題基準と乖離した内容になっていないかを確認しながら、必要に応じてブラッシュアップをしていく所存である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前回の授業の復習をするために、最初にGoogleフォームを用いた確認テストをしている。結果がすぐにグラフで反映されるため、授業内容に対する学生の理解度の確認にもなる。授業は使用している教科書をもとに、内容をまとめた講義資料とスライドを用いて実施している。また、その回と関連する歯科医師国家試験の過去問題を練習問題として解き方を解説している。

2) 自己点検・評価

講義資料は単にパワーポイントのスライド一覧ではなく、ワードファイルにしたものを別途準備し、字が読める資料を心がけている。Googleフォームでの確認テストにより、リアルタイムで作成される正答率グラフをもとに解説することで、双方向性も確保している。スライドには適宜動画を挿入することで、わかりやすいように工夫している。内容が多い場合に、授業の後半で説明が不足することが問題点である。

3) 改善方策

1回の講義で内容が多いものに関しては、内容を2回に分けて実施するような見直しが必要と考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験と追・再試験により100点満点で評価している。80点は筆記問題で、授業で提示した重要3項目に関する問題を出題している。20点は選択肢問題で、授業で提示した歯科医師国家試験の過去問題を改変した問題を出題している。筆記試験と選択肢試験の合計が65点以上の者が合格となる。なお、小テストの解答は5点満点に換算し、試験成績に上限100点で加点している。

2) 自己点検・評価

定期試験と追・再試験の終了後に正答を配布し、その場で学生からの疑義を受け付けている。また、定期試験と追・再試験は異なる範囲から出題することで、追試と再試の受験者に対する公正性を担保している。

3) 改善方策

採点開始前に学生からの疑義を受け付けることにより、模範解答に提示した以外の解答をどのように処理するかについて、客観性を担保している。今後もこの形式を継続し、適切な成績評価を継続していきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	災害歯科医学 板橋 仁	第3学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

東日本大震災を経験した本学において「災害時の医療体制・歯科的個人識別等、災害発生時の歯科医師の役割について学び、社会に貢献できる歯科医師となること」を目標として、1) 災害時における歯科医師の役割を説明できる。2) 災害時の医療体制について説明できる。3) 歯科的個人識別について説明できる。4) 歯科法医学の基本について説明できる。を到達目標に掲げ講義を行なった。

2) 自己点検・評価

概ね良好に捉えられているものと判断する。しかし1人の学生から「衛生の範囲を細分化しないで欲しい。他大学でやらない事は不必要。大学の特色とか要らない。どの科目にも言えるが国試合格に特化した講義だけを行なって欲しい」との意見があった。

3) 改善方策

本科目を真面目に勉強した学生の方が多いとは思いますが、その一方で、本科目を設置した根幹に関わる大切な意義を最後まで理解せず、ただ「国試対策だけやって欲しい」という学生がいた事は、学部長をはじめとして本科目に関わる先生方にも申し訳ない気持ちである。(残念ながら人としての根本に関わる事であり、そう簡単に改善策を見つけることは出来ないと考える)

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

「1) 災害時における歯科医師の役割を説明できる。2) 災害時の医療体制について説明できる。3) 歯科的個人識別について説明できる。4) 歯科法医学の基本について説明できる」ために、レジュメを配布して講義スライドを中心に解説し、教科書の該当箇所を確認した。昨年はスライドが暗く見づらいとの意見があったので、背景の色に配慮した。

2) 自己点検・評価

今年スライドに関する苦情はゼロであった。しかし、講義に集中するように意図してレジュメを最低限に抑えたことで、逆に「スライドにしか表示していないものがあり、もっと資料欲しかった」との意見があった。

3) 改善方策

レジュメに入れてないスライドは、送りのタイミングを少し遅らせるなど、配慮する必要がある。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験及び追再試験(100%)により評価し、65点以上で合格として判定した結果、本試験では9名が不合格であった。再試験でも合格点に達しなかった2名について、最終的に不合格と判定した。

2) 自己点検・評価

不合格の2名は明らかに勉強不足であり、勉強した学生との差がはっきりと現れたものとする。解釈が難しい【適宜試験】なるものではなく、評価の基準が簡潔明瞭で、これを継続すべきと考える。

3) 改善方策

特待生から「特待生維持のため点数を知りたい」とのメールが数多く寄せられた。何とか全員がそれぞれの条件をクリアしていたので安堵したが、もし点数が足りない場合は特待維持が出来なくなるため、メールが来る度に気が気ではなかった。(※それでもやはり【適宜試験】なるものは行うべきではない、というのが自分の考えであるが)

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	総合臨床医学 風間 咲美	第3学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「医の倫理について説明できる」、「インフォームドコンセントについて説明できる」、「医療安全の意義について説明できる」は、講義の中で、身についたと思います。「主要な症候と対処法について列挙できる」および「疾患の診断と治療について説明できる」に対しては、各回の講義で詳細に行ってます。

2) 自己点検・評価

長所：「主要な症候と対処法について列挙できる」、「疾患の診断と治療について説明できる」について各講義で詳細に説明した点。学生の評価で、各質問において「そう思う」という回答が多く、高評価だったと思います。
問題点：「倫理」、「インフォームドコンセント」、「医療安全」については、あまり説明しなかった点。

3) 改善方策

長所をさらに伸ばさせるための方策：「主要な症候と対処法について列挙できる」、「疾患の診断と治療について説明できる」に対しては、現状を維持しつつ、国試等を参考に最新の事項も取入れたいと思います。
問題を解決していくための方策：医の倫理、インフォームドコンセント、医療安全は、従来どおり踏襲しようと考えましたが、他に、より専門の講義があるため、次年度から当講座はシラバスより削除しました。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

スライドおよび配付資料を用いて、各疾患の概要、自覚・他覚症状、診断および治療方法につき、学生が理解し、説明できるよう、講義を行っております。理解の補助となるよう、可能な限り視覚教材を用いて遂行しています。国試も念頭に置き、講義を進めています。

2) 自己点検・評価

長所：配付資料により、家庭でも講義の内容を確認できる点、視覚教材の多用により、理解しやすかったと考えられる点。実際、学生の評価でもイラストが多く分かりやすいという意見があります。
問題点の明示：国試出題基準やコアカリキュラムでは、当講座に該当する項目が多く、学生には非常に負荷が大きい点。

3) 改善方策

伸ばさせるための方策：当講座の該当範囲の国家試験の正解率を上げるため、次年度から、知識を完全なものにするため、講義前に確認テストを行う予定です。
解決していくための方策：国試出題基準やコアカリキュラムで提示されて内容につき、より、焦点を絞って講義を進めたいと考えます。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

試験方法はシラバスどおり、マークシート40問で、範囲は講義で行った内容としました。シラバスに記載されているとおり、定期(後期)試験で、65点以上を合格としました。再試は1回のみ行い、65点以上を合格とし、4名が合格しました。再々試験は行いませんでした。また、定期試験のフィードバックは正答をそれぞれの試験終了後、配布しました。

2) 自己点検・評価

長所：シラバス通りに遂行しました。試験の難易度も妥当だったと考えます。
問題点：シラバス通り行ったため、ありません。

3) 改善方策

今後も、試験方法は踏襲する予定ですが、さらに国試における、常に新しい傾向を探り、講義や試験において学生に還元する方策です。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	総合演習 3D 金 秀樹	第 3 学年
--------------------	-----------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床実習開始前までに習得すべき歯科医学的知識を理解することを目的として、第三学年に履修する科目を中心に、演習と解説講義を行う。また、学年末の総合試験に合格できる総合力を身につける。

2) 自己点検・評価

ある一定の教育目標は達成していると考ええる。

3) 改善方策

一定の目標は達成していると考ええるが、さらに学生がより理解を深められるようさらに工夫していく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

歯学部における専門科目を十分に理解するために、その基礎といなる知識の習得を目指し問題演習を主体として適宜プリント配布、PCを用いPCでも講義の際には学生の理解力を高めるために動画などを用いて解説を行っている。

2) 自己点検・評価

ある程度充実した教育効果が得られているものと判断する。

3) 改善方策

一定の目標は達成していると考ええるが、さらに学生がより理解を深められるようさらに工夫していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

総合試験 3D で評価する。72.00%以上を合格とする。72.00%に満たない者は、再試験を受験させる。再試験も本試験と同様に72.00%以上を合格とする。

2) 自己点検・評価

概ね問題ないと考ええる。

3) 改善方策

現段階では改善の必要性なし。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	保存修復学Ⅱ 山田 嘉重	第4学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

コンポジットレジン、メタルインレー、セラミックインレーなどCBTや歯科医師国家試験に多く出題される項目について、各機器の特徴、術式を習得することを主な到達目標としていた。今年度はほとんどの学生が定期試験で合格していたことから、到達目標の達成はかなりできていたものと思われる。

2) 自己点検・評価

教科書に沿って授業を進め、授業に関連した試料の配布したことから、復習する際に理解し易くなったものと思われる。また模型実習と並行して講義が行われたことから、授業で学んだ内容を実習でさらに習得しやすくなったことも関係していると思われる。

3) 改善方策

授業内容に理解ができず、付いて行かない学生も少なからずいることから、基本的な事項、大切な事項については繰り返し講義を行い、学生の理解度と習得度を向上させていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

講義は主にスライド、配布資料を用いて行った。授業内容は指定教科書だけでなく、参考教科書の内容も加えて行った。

2) 自己点検・評価

学生には授業後当日または遅くてもその週のうちに必ず復習をすることと、その際に講義プリントだけでなく、教科書を併用して復習することを毎回指示していた。ほとんどの学生が本試験で合格し、不合格であった学生も全員再試験で合格したことから、必要とする授業内容を学生が理解できたものと考えている。

3) 改善方策

全学生が本試験で合格できるよう授業をよりわかりやすくするよう検討していく。授業開始前に確認小テストを行い復習状況を確認することも検討する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績は中間試験30%、定期試験70%の配分で合計65点以上成績で合格とし、65点未満の学生には再試験を行い評価した。

2) 自己点検・評価

定期試験でかなり多くの学生が合格したことから、理解度の把握のための試験内容やその評価法は適正であったと考えている。また中間試験の成績が良いが定期試験の成績が悪く不合格になった学生、定期試験の成績が良いが中間試験の成績が悪く不合格になった学生はいなく、整合性がとれていたと考えている。

3) 改善方策

今年は例外的に中間試験を施行したが、次年度から従来通り定期試験の成績で検討していく。ただし、授業開始時に確認小テストを行うことや、授業態度についても評価の考慮に入れることを検討していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	保存修復学実習 山田 嘉重	第4学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

齲蝕、非齲蝕性硬組織疾患による実質欠損に対して適切に治療を行うための技能と態度を身に着けることを目標とした。
具体的には保存修復学領域の治療となるコンポジットレジン修復、メタルインレー修復、レジンインレー修復に対する窩洞形成と修復法を理解することを目標とした実習を行っている。

2) 自己点検・評価

到達目標達成のために4倍大石膏模型による形態の確認後に等倍大の人工歯を用いた模型実習を行っており、学生が各種材料の使用法、各種修復法を理解しやすいようにステップを踏んだ実習を行えたと評価している。

3) 改善方策

実習内容を理解・習得することより課題達成を優先とする学生が少なからずいたことから、学生が実習内容を理解しながら進めるよう、各インストラクターと協議しながら質の高い実習になるよう実習を進めていく。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習開始前に実習書を使用して、実習の進行手順と注意点をあらかじめしっかり注意を行い実習を開始するようにしている。また疑問点や問題点が生じた場合はすぐに担当インストラクターに確認と粗銅を仰ぐように逐一学生に指示をした。

2) 自己点検・評価

自分が行った実習内容が課題に沿って適切におこなわれたかを常に確認して進むように指導した。

3) 改善方策

実習を通して授業で習った事をより理解してもらうことが実習の大きな目的であることから、学生1人1人が今行っている過程と授業で習った事との関連をしっかりと理解してもらえよう実習を進めていく。特に次年度から実習で行える内容は限定的になるので、理解度が落ちないように細かく対応していく。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績は、実習中に行った窩洞形成や修復物の評価（50%）と最終日に行う実技試験による評価（30%）、出席点（20%）を総合して最終評価とした。

2) 自己点検・評価

実習課題および実技試験の評価法はしっかり行ったと考えている。実習課題の施行内容や実技試験により、各学生の実習内容の習得度や苦手とする項目を把握できたと思われる。

3) 改善方策

実習の評価はどうしても課題の達成程度やその内容に依存してしまうが、実習がいかに上手くできたかということだけでなく、実習を通してどの程度講義で習った内容の理解度が深まったかも大変重要であるので、実習作成物の良否だけでなく、実習に対する姿勢についての評価もしっかり検討していく。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯内療法学 木村 裕一	第4学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯内療法学の科目における一般目標は、歯の硬組織・歯髄および根尖歯周組織などの疾病に対する予防と診断・治療そして予防を行うために基本的な知識、技能および態度を習得することである。また到達目標を大きく10項目に分けて示した。授業では全てを網羅したが、試験結果では78名中5名(6.4%)が不合格となったことから判断すると成績の下位の学生において到達目標は達成できていなかったと考えられる。

2) 自己点検・評価

試験結果では、5名が不合格であった。今後は学生のさらなる学力向上を図るためには到達目標をさらに綿密に立案することが必要である。また、現在示している到達目標は歯内療法学のすべての範囲を網羅していると考えられるが、学生にとってかなり漠然としていてわかりにくいことが推測されるため、より具体的に示す必要がある。各授業ごとでは要点を提示していたが、良く伝わっていなかったことが考えられる。

3) 改善方策

到達目標の全体の数が増えるが、シラバスの紙面が許す限り、より具体的でさらに細かな内容にして提示すべきであると考えられる。CBTと国試の出題が広範囲に渡っているため、全てを網羅するためには数が増えるが、到達目標をより具体的に理解できるように示さなければならない。また試験直前だけではなく、毎回の講義終了ごとに復習して知識を積み重ねていくことが要求される。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書を中心にして、特に重要なところを資料として配布している。また、教科書に掲載してある写真を利用して詳しく説明している。図または術式はPCを用いて治療器具や症例を示している。また、写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにしている。そして授業の最後にその授業と関連のある国試問題、CBTパスの問題を提示している。

2) 自己点検・評価

授業がわかりにくいとのアンケート結果から、授業中に板書して説明をさらに詳しく行う必要がある。長所として、写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにしていることが挙げられる。また、まとめたプリントを配布したが、あまり効果がなかったようである。

3) 改善方策

教科書を中心に進めていくが、授業の資料としてさらに多くの症例をPCを用いて視覚的に提示していく。そしてできるだけ黒板に書いて説明するようにする。さらに双方向性の授業を行うように心がける。写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにする。器具を使用している臨床の場面はビデオ等を利用して説明し、理解が深まるように工夫する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

本年度は前期のみで終了したため、中間試験と前期の講義が終了後の試験で講義内容の理解度について筆記試験と多肢選択肢問題を行い、試験のみで評価し、中間試験と前期終了試験の平均が65点以上を合格としている。現状では、形成的評価は行わず、総括的評価のみで行った。

2) 自己点検・評価

現在、行っている試験では65点を合格点としているが、国試が年々難しくなっている現状を考えると合格点をもう少し上げるべきであると考えられる。ただなかなか65点まで達していない学生が一定の割合いるのが現状である。前年と比較すると不合格者の割合が少し増加したことから考えると、筆記試験が苦手という学生がいるため、本年度から多肢選択式の問題を評価に入れた。

3) 改善方策

現在の筆記試験と多肢選択式の問題による総括的評価を続ける。今後は通年科目となった時に中間試験を実施するのかどうか、また評価法もできるだけ多面的にして総合的な評価をする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯内療法学実習 木村 裕一	第4学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床実習において根管治療を行うために根管形成および根管充填の術式と技術の基本的な知識、技能および態度を習得することを一般目標にして、また到達目標を細かく具体的に10項目に分けて示している。最終的評価では、全員が合格点に達していたことから判断すると一応、到達目標は達成できたと考えられる。

2) 自己点検・評価

最終評価では、全員が合格したこと最低限の目標には到達していたと考えられる。学生アンケート結果からは到達目標に関しては何も意見がなかったことから理解されて受け入れられているものと考えられた。しかし、今後、学生のさらなる学力向上を図るためには到達目標をさらに見直しをする。

3) 改善方策

到達目標をさらに細かく具体的に示して理解しやすいようにして、レベルの高いものまで含むようさらに綿密に改善していかなければならない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各課題の手順は実習書のなかにある写真(図)で示し、必要と思われる箇所については実際にデモを行っている。実習では一人のインストラクターが学生12~18名ぐらいを担当し、各学生の根管治療における到達度をステップごとにチェックをしている。

2) 自己点検・評価

実習書がわかりにくいとのアンケート結果より、実習書を再点検しなければならない。学生12~18名ぐらいの少人数を一人のインストラクターが担当したが、インストラクターの数が少ないとのアンケート結果から、インストラクターの数を増やすことも検討していかなければならない。他の分野(保存修復)から手伝ってもらってはいるが、インストラクターの数がまだ、十分ではないようである。

3) 改善方策

実習書は毎年、改正をしているが、今後、さらに修正、改訂を加えて学生にわかりやすいように書き直しをしなければならない。教員のさらなる確保ができれば各インストラクターが担当する学生数を減らすことができる。また、手技をわかりやすくするため、モニター等を活用してビデオや実演を示し、よりわかりやすくなるように工夫を行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

ステップごとの検印の時に、技術的に一定レベルに達していない場合にはその都度、指摘してフィードバックし、そして修正させて合格基準に到達するまでやり直しをさせている。また、それぞれの課題が終了するごとに途中経過の状態をチェックするために製作物を提出させて採点し、技能評価(60%)、実習試験(40%)により評価し、65点以上の者を合格として評価を行った。

2) 自己点検・評価

途中経過、または最後の製作物のチェックは一人の採点者が行うので評価基準が一定であるが、ステップごとのチェックは各インストラクターによって行っているのでインストラクターによって技能に差があるため、評価基準にばらつきが生じやすい。学生の理解度がどの程度なのか判断しにくい、全員が合格点に達していたので、目標は一応達成されたと考えられる。

3) 改善方策

各ステップごとのチェックに関しては、時間が許す限りインストラクター間の打ち合わせを事前に十分に行う必要がある。また、評価に関してはできるだけ総合的に評価することが望ましいので、技能評価の他に小テスト点も加味して行うようにしていたが、今後は範囲となる項目を絞ることを検討する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯周病学 高橋 慶壮	第4学年
--------------------	---------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバスに沿って行った。歯周病学では、1年間45コマで全範囲を講義するため、範囲が膨大になり、予習と復習が不可欠になる。

2) 自己点検・評価

教科書に指定している臨床歯周病学とザ・ペリオドントロジーの相違点を解説し、学生の理解を深める工夫をしている。一方、学生の自主的な学びの姿勢が不可欠であるため、講義中に集中していないあるいは寝ている学生は講義を理解できないのかもしれない。学生間の学力差は如何ともしたいので、中間よりやや上を意識して講義をしている。

3) 改善方策

特段の変更は必要ないと考えている。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書に指定している臨床歯周病学とザ・ペリオドントロジーの相違点を利用しつつ、毎回の講義はpower pointを使用した講義スライドを用意し、事前にPDFをユニパで配信して予習ができるように配慮している。学生に学びの姿勢を身に付けさせる工夫をしている。

2) 自己点検・評価

試験結果（マルチプルチョイス形式）からは、おおむねCBTの学力と関連していると思われる。

3) 改善方策

特に変更する必要は感じていない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

令和6年度は通年の講義を後期にまとめて行ったため、教員以上に学生の負担が大きいと危惧されたが、試験の結果は概ね良好であった。

2) 自己点検・評価

ここ数年の結果からは、学生の理解度を客観的に評価できていると考えてる。

3) 改善方策

特段の変更は考えていない。正答率の高い問題（90%以上）については微調整を継続する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯周病学実習 高橋 慶壮	第4学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバスに沿って行った。歯周病学実習では、各治療手技に加えて、臨床における診断力、具体的には口腔内所見、歯周組織検査およびレントゲン写真の読影力を身に付けるトレーニングが重要になる。しかし、現状、歯周疾患や歯内疾患のレントゲン所見を読影して説明する実習は皆無であるため、症例検討の練習と口頭発表を通じて、一口腔単位の診断に基づく治療計画の立案を模擬経験してもらっている。

2) 自己点検・評価

一口腔単位の診断に基づく治療計画の立案を教える数少ない実習であるため、今後も、学生には「考えないで丸暗記」ではなく、理解して内容を把握する勉強を支援する必要がある。指導上、繰り返し各自の知識の定着を図ることを促しているが、答えが分かればよいという考え方の学生にはこちらの意図が十分に伝わっていないかもしれない。

3) 改善方策

特段の変更は必要ないと考えているが、これまでと同様に、実習の到達目標と学生の実習に取り組む姿勢について繰り返し指導する。指導する教員の数が少ないので、保存修復と歯内療法科から応援を依頼した。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習帳に沿って15コマで実習を行っている。令和6年度は中央棟の耐震工事のため、急遽基礎棟2階の基礎実習室で行った。回転切削器具等の設備はなかったものの、おおむね例年通りの実習が行えた。

2) 自己点検・評価

実習内容によって作業時間や片付けの煩雑さが異なるので、豚顎実習では特に時間がかかるが、これは仕方ないことで、あらかじめ実習の概要と予定を説明している。

3) 改善方策

特に変更する必要は感じていない。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

一般問題と治療計画に分けて実習試験を行っている。65点に満たない学生には再試験を行った。診断の基盤になる口腔内写真とレントゲン写真の読影および歯周組織検査結果との関連性を推測して考えるトレーニングが不足している学生が散見された。換言すれば、理解度の浅い学生は答えの丸暗記を勉強と考えているようなので、そこを指導して考える力を要請するのが本実習の目的でもある。

2) 自己点検・評価

ここ数年の結果からは、学生の理解度を客観的に評価できていると考えてる。

3) 改善方策

特段の変更は考えていない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	冠橋義歯補綴学Ⅱ 羽鳥 弘毅	第4学年
--------------------	-------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために教科書、教科書をまとめた講義資料（講義に先立ちユニパに掲示）、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。この際「一般目標」の内容を反映させて講義を行った。本科目は冠橋義歯補綴学の各論内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容が深く理解できるよう配慮している。

2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。「授業はシラバスに沿って進化したと思いますか。」の項目では「そう思う（67%）」の評価を得た。「到達目標」は「可もなく不可もない状態」と自己点検します。

3) 改善方策

「到達目標」をさらに向上させる必要があると考えられるので、「シラバスの記載とシラバス熟読のアナウンス」や「教科書の学習の目標」に沿って熱意と工夫に満ちた講義を行うことでさらなる高評価を得られるよう取り組みます。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書、教科書をまとめた講義資料（講義に先立ちユニパに掲示）、CBT対策問題などを使用して講義を行った。必要に応じて、症例写真も取り組むことで視覚的に理解が進むよう配慮している。

2) 自己点検・評価

教育方法では「授業前の予習」では「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」で71%、「授業後の復習」の項目では「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」で88%であった。これらのことから学生は自主的に勉強していたことと考えられます。学生が自主的に勉強に専念していたことは長所であると思います。教員の熱意や授業の工夫によりさらに良い講義にしたいと思います。

3) 改善方策

今後の資料作成は年度更新ごとに国家試験などの出題内容を追加することにより教育方法を改善していきたい。CBTに出題される臨床推論問題なども指導していきたい。他には1問1答式もしくは穴埋め式の演習問題、MCQでの演習問題を作成していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期の定期試験において点数が65点以上を合格とする。点数が65点未満の場合には再試験を行う。点数が65点未満の再試験該当者は、再試験の点数が65点以上でも65点の採点結果とする。

2) 自己点検・評価

長所は定期試験での不合格者がいないことである。
問題点は採点結果が低い学生が一定の割合で存在することである。”想起→解釈⇒問題解決”のどこかで情報を整理仕切れていない学生が存在することと判断します。この結果がCBTでの失点につながってしまうと考えられます。授業の進め方なども含めて改善する必要があります。

3) 改善方策

試験問題の正答（率）や識別係数などを判断材料として、授業資料と試験問題のブラッシュアップを行う予定です。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	冠橋義歯補綴学実習 羽鳥 弘毅	第4学年
--------------------	--------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために学生を4つの班に分け、各班には2名のインストラクターを配置して指導を行っている。ステップごとに各班でのデモンストレーションを行い、実習内容の説明を行っている。また講義時間中にもスライドを用いて、歯冠形態の復習を行っている。本科目は冠橋義歯補綴学の各論内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容と実習が深く理解できるよう配慮している。

2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。アンケート結果より「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」が90%近いことから、「到達目標」は高評価と自己点検します。問題点としては、実習であることから学生の進捗が異なり授業の準備（時間配分や資料作成など）を行いにくいことです。

3) 改善方策

「到達目標」は高評価であると考えられる。当分野としての方策は、「実習内容の質」の向上に取り組みたい。具体的には「インストラクターの個々の能力」が向上することを期待し、学生からさらなる高評価を得られるよう取り組みたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

当分野で製作したオリジナル実習書を使用し教育している、実習に先立ち実習内容の小テストを行っている。小テストは解答後に回収し、回収後には試験の解説を行っている。伝統的に実習内容が非常に豊富であり、他大学に比べて丁寧な実習指導を行っていることは本学が他大学に誇れる教育方法の一つだと思います。

2) 自己点検・評価

10の評価項目のうちほとんどで「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」が90%近かったことから本実習の評価は高かったと思う。さらに学生と教員の信頼関係は厚かったと推察される。これは当分野のインストラクターの教育にかける情熱の賜物であり長所と考えます。問題点は、技工の指導に終始し、臨床術式との関連が少し不足したことである。

3) 改善方策

実習概要としては学生から高評価を得ているため実習教育方法は現状維持でよしいかと考えます。学生から改善してほしい点として、「教科書と実習書との相違」と「インストラクターの指導内容の均質化」を指摘されたので改善していきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期の実習期間での実習製作物評価（25%）、小テスト結果（25%）、実習実技試験（25%）及び実習筆記試験（25%）を総合して評価する。

2) 自己点検・評価

長所は本実習での不合格者がいないことである。
問題点は採点結果が低い（＝ほとんどが実技点での失点）学生が一定の割合で存在することである。

3) 改善方策

実習実技試験での不合格者に対しては、個別に再教育を行い再試験に臨ませることで合格点に達するよう配慮している。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	有床義歯補綴学Ⅱ 高津 匡樹	第4学年
--------------------	-------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

令和5年版歯科医師国家試験出題基準、ならびに令和4年度改訂版歯学教育モデルコアカリキュラムに準拠して到達目標を設定した。授業はシラバスの記載に沿って行うとともに、項目ごとの到達目標や目的を提示しながら行った。中間試験と定期試験は、授業で教えた内容から出題されていることを、授業担当者に確認して行った。

2) 自己点検・評価

本年度は3年有床義歯補綴学Ⅰと並行しての実施となった。そのため、本科目の講義の多くを、松本講師（現准教授）に担当してもらった。アンケートの指摘にもあるように、配付資料の改善が必要である。それでも松本先生の講義はわかりやすいとのコメントが多かったのは救いである。

3) 改善方策

スライドと配付資料は、現在修正中である。より教科書ベースとし、CBTに対応できるよう基本的な内容を中心とした内容にする予定である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

担当責任者を含め、3名の教員が講義を担当した。いずれも講義プリントを配布し、スライドと教科書を用いた講義中心の授業を行った。1限目の授業の最初に、前週の講義内容に対する小テストとその解説を行った。また、前期途中の理解度を確認するため、中間試験を行った。

2) 自己点検・評価

講義資料は2名の教員が共有することで、一貫性を保つことができた。また、不足部分は互いに補足し合うことができた。本年度は3コマ連続した講義であったため、時間の調整が少し難しかったと感じた。穴埋めの配付資料の学習効果に疑問はあるものの、これに代わる効果的な方法が現状では見当たらないので、次年度は内容の修正は加えるが、方法の変更は行わない。

3) 改善方策

双方向性の要素を高めるため、講義中の学生への質問を増やすことを検討しているが、学生の反応をみながら実施する予定である。授業開始時の小テストは、評価が散見されているので、今後も継続する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価は中間試験40%、定期試験60%とし、この評価で65点に到達しなかった学生を対象に再試験を行った。各試験の平均点は、中間試験76.7点、定期試験本試験76.0点、再試験78.8点で、最終評価の平均は77.2%（いずれも加点なし）で、不合格者は0名であった。

2) 自己点検・評価

授業のアウトプットとなる試験の結果をみると、授業内容と試験内容の整合性はとれていると考える。試験問題は前年度までとは内容や形式を一部変更した。学生には事前に説明していたので混乱はなかった。評価方法については、シラバスに記載し、授業中に説明しているにもかかわらず、定期試験後に数名の学生から問合せがあった。他の多くの科目と異なるためと考える。

3) 改善方策

試験問題については、不満を抱く学生もいるが、色々な形式の問題を試して行く予定である。次年度は中間試験を行わず、定期試験のみの評価とする。ただし、定期試験の結果をみて、学習効果や一発勝負の危険性など中間試験の有効性が示されれば、再開することを検討する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学Ⅱ実習	第4学年
(記載者)	高津 匡樹	

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

国家試験やCBTへの対応を念頭に、実習内容をもとにして到達目標を設定している。また、実習内容は、自ら部分床義歯を製作することで、講義内容への理解を深めるとともに、基本的な技術の習得することを目的としている。

2) 自己点検・評価

部分床義歯の製作過程は非常に多く、また装置のバリエーションも豊富なため、あらゆる項目を網羅した内容の実習とすることは困難である。特に、印象採得や咬合採得といったチェアサイドでの操作は非常に重要ではあるが、設備的な都合もあり行っていない。

3) 改善方策

学生からの指摘コメントはなかったが、一部の内容が現状から乖離している部分があるので、次年度の実習では変更する予定である。また、基礎棟実習室の使用、実習時間削減により、次年度の実習内容が大幅に制限される。実習書の改善について指摘があったが、次年度は実習内容の変更に伴う一部修正にとどめる。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

小グループごとに教員を固定して、少人数制の指導を行っている。新しい項目に進むときは、中グループごとにデモを行っている。実習の最初に指定範囲の小テストを行っている。

2) 自己点検・評価

小グループごとの指導のため、丁寧な指導が可能となっている。ただし、班により進行が異なる点は仕方ないと考えている。一部の教員にハラスメントがみられたことは残念である。

3) 改善方策

次年度も同様の指導体制とするが、グループごとに指導内容が異なるように、事前に打ち合わせを行っているが、次年度はこれを徹底することで改善を図る。ハラスメントについては、事前の打ち合わせで注意喚起を行い、再発防止に努める。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

実技試験30%、製作物30%、筆記試験20%、実習ごとの小テスト10%、履修態度10%で評価している。製作物は個人の技能の他に指導教員の影響が含まれるので、配点が突出しないよう設定している。教員への依存が高い学生や欠席が多い学生は履修態度で減点している。また、目的の一つである講義内容への理解を深めるため、毎回小テストを行っている。

2) 自己点検・評価

各項目の平均点は、実技試験70.6点、製作物69.2点、筆記試験88.1点、毎回の小テスト76.9%点、履修態度94.5%点、評価点は75.9%点であった。全員合格。

3) 改善方策

評価については妥当と考える。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔インプラント学 (座学) 高橋 昌宏	第4学年
--------------------	-------------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

口腔インプラント治療は、口腔インプラントの特性と臨床的意義を十分に理解し、適切な治療計画を立案することが重要である。本講義の到達目標は、口腔インプラント学と関連した基礎歯科学である、解剖学、理工学、病理学の基礎科目、また、歯科臨床専門科目に講義を分担担当することで知識を得て、理解を高めることである。

2) 自己点検・評価

1日3時間の連続講義で、詰込み型の講義になっている。口腔インプラント学の講義は他の科目との結びつきが強く、基礎歯科学である、解剖学、理工学、病理学の基礎科目、また、歯科臨床専門科目などの応用編になる側面があり、理解が困難であることが想定される。

3) 改善方策

カリキュラムの構成上、1日3コマ連続の講義なので、どうしても詰込み型の授業になりやすく。複数の講師により講義が担当されるので、一貫性にかける可能性がある。また、(公社)口腔インプラント学会のホームページに掲載されている動画資料なども用いることによって、興味をより持つように、より深く理解するように工夫する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

「よくわかる口腔インプラント学 (医歯薬出版)」を指定教科書にしてPCを用いてスクリーン上に映写して講義を進めている。

2) 自己点検・評価

講義形式は、PCを用いて作成したスライドをスクリーン上に映写して講義を行う。1日3時間の連続講義内容を約2ヶ月半で終了する日程になっており、どうしても詰込み形式の単調な講義になっている。講義の進行が早いことので、講義が単調になりやすく、理解しにくい項目が残りやすい。

3) 改善方策

インプラント学は、繰り返し重要な項目を網羅するように重要項目は繰り返し触れて、強調し、知識の定着を図るように工夫する。また、イメージがわきにくい項目を(公社)口腔インプラント学会のホームページに掲載されている動画資料なども用いることによって、より深く理解するように工夫する。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

講義全範囲を試験範囲として定期試験を実施している。(マーク試験形式)各模擬試験の出題問題も参考にして、可能な限り標準的な問題作成を心がける。また、その年度の講義担当者の作成した、口腔インプラント学に関連した問題を収集して、50問の問題数の試験で成績と出席点により評価している。

2) 自己点検・評価

試験は、マーク試験形式で評価している。模擬試験問題も参考にして可能な限り標準的な問題を出題するよう心がけている。成績分布も成績上位、中位の母集団に分かれるが、ほぼ大多数の学生は合格に達する成績をおさめている。本年度の再試験当者は6名で、再試験後全員合格点を確保している。

3) 改善方策

国家試験でも頻出な分野の標準的な試験問題を出題するようこころ掛けている。口腔インプラント学の重要項目をまとめた資料を事前に配布している。インプラント学は、繰り返し重要な項目を網羅するように重要項目は繰り返し触れて、強調し、知識の定着を図るように講義を行う。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔インプラント学 (実習) 高橋 昌宏	第4学年
--------------------	-------------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

本実習は、口腔インプラント学 (座学) 講義のみでは理解困難な項目に関してインプラント体の埋入にいたる、診査、診断、埋入に至る過程を、本実習通じて疑似体験することによって、より深い知識の定着、理解の習得を得ることを目標にしている。

2) 自己点検・評価

実際の症例デモ資料を使用して様々なトレーニングを行うことにより、講義だけでは理解困難な項目を体系的に深く理解することが可能になる。単なる知識を暗記することだけでなく、治療内容を理解するようになっている。

3) 改善方策

従来の口腔インプラント治療の工程の流れ、診査、診断、治療を学ぶことは可能であるが、近年、現在の口腔インプラント治療は、日進月歩であり、様々な最先端の口腔インプラント治療を実習で経験することは困難である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

口腔インプラント体埋入にいたる、診査、診断、実際の埋入に至る過程を、資料や模型を用いて疑似体験することで、より深い知識の定着を図ることを目標にしている。本実習は、インプラント関連メーカーの協力の下に成立している。ノーベルバイオケア社：埋入実習器材、アイキャット社：診査、診断、外科用ステント作成過程

2) 自己点検・評価

実際の現場で用いられている器材、シュミレーションソフトなどを用いて可能な限り、実践に即した口腔インプラント治療の診査、診断、治療を学生本人が疑似体験するので、大変有益であると考えられる。

3) 改善方策

口腔インプラント学会のホームページでも扱われている、口腔インプラント学実習動画などを活用して、さらに口腔インプラント治療学の理解、知識の定着を図ることも取り入れていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

講義全範囲を試験範囲としてレポートと実習模型を提出させ、態度点なども加味して、総合的に成績評価する。

2) 自己点検・評価

講義全範囲を試験範囲としてレポートと模型を提出させ、総合的に成績評価する。出席とこれらの提出物、レポートと実習試験の成績を加味して評価している。

3) 改善方策

その年度に出題された模擬試験問題も参考にして可能な限り標準的な問題を扱うように心がけている。全員合格点を確保している。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔外科学Ⅱ 川原 一郎	第4学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

顎・口腔領域の疾患に罹患した患者の健康維持・増進を図るために、①手術総論、小手術の知識 ②嚢胞および嚢胞性疾患 ③唾液腺疾患 ④腫瘍および腫瘍類似疾患 の基礎知識および臨床的な知識を習得させるために授業をおこなっている。

2) 自己点検・評価

例年は通年30コマでしたが、今年度は後期のみ30コマだったので非常にタイトだったが、学生の授業評価から判断すると、到達目標は達成できたと考える。

3) 改善方策

基本事項を強調し、よりわかりやすく理解させる授業に心掛ける。双方向性の講義スタイルを取り入れ質問しやすい授業に心掛ける。板書時に字が読みづらいとの指摘があり改善を心がける。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書と教員の作成したプリントをもとに授業をおこなった。重要事項は板書し説明を加え、例え話を交えて理解しやすく工夫した。さらに投影視覚素材を使用しわかりやすい授業内容に心掛けた。さらに、プリントは学生に書いてもらえるように余白を多く設けて対応した。

2) 自己点検・評価

授業内容が他大学と比較して内容が薄いとの意見があった。授業では基本的事項の理解が重要と考えるので、現在の教育方法で問題ないとする。

3) 改善方策

上記指摘事項がないように、基本的事項の理解が重要である旨を理解させるように心掛けたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

評価方法は定期試験の結果で65点以上を合格とした。定期試験欠席者に対して追試験をおこない、65点未満必要の学生に対して再試験をおこなった。試験は多肢選択および記述式試験でおこなった。

2) 自己点検・評価

定期試験・追再試験を実施し、3名を除き合格とした。学生は授業内容を理解し到達目標に達していると考え。また不合格の3名についてもCBT本試験再試験で不合格だったことより評価は妥当と考える。

3) 改善方策

今後も同様の評価方法で成績評価を行うので問題ないとする。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	口腔外科学Ⅲ 高田 訓	第4学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

後期のみ、15時間の授業で徹底した各論の詳細講義とし、臨床実習直結型の目標となっている。非常勤講師の講義を行うことで、臨床に近づくモチベーションとなっている。

2) 自己点検・評価

到達目標の設定は具体的で理解し易く、目標に沿った授業日程を組むことができています。非常勤講師の講義をより臨床に近づけ、学生に興味を持たせることができた。

3) 改善方策

非常勤講師とコミュニケーションを保ち、興味ある講義を行いたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

教科書を用いた基本的内容を講義し、臨床に直結させられる写真媒体を多く取り入れた講義を行っている。

2) 自己点検・評価

高いモチベーションを確保するためにフィールドワークを取り入れよと考えたが、現状は不可能であった。非常勤講師の貴重な資料、写真、症例を提示する機会を多く取り入れ、さらに時間をかけて説明する必要がある。

3) 改善方策

成績不良者には、国家試験出題基準に沿った教科書の内容を十分理解できているか、それが卒業試験と国家試験に直結することを理解しているか、自学自習や予習、復習などの方法を教える必要がある。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

授業内容の確認を主体としたMCQと筆記の試験を行うとともに、記述の頻度を高くした。

2) 自己点検・評価

総括的かつ重要項目については十分に正しい評価ができた。昨年と同様、臨床実習に近い学年であるにもかかわらず、臨床実地に必要な知識を評価できたか否かは不明である。

3) 改善方策

試験の成績評価に下駄を履かせることや、追加試験、不要な適宜試験などを行い、無理矢理進級させる試験は絶対に行わない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科麻酔学 山崎 信也	第4学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

広く基礎医学と臨床医学を理解することで、的確に患者の全身状態を評価し、その上で安全な患者の生体管理を実践するために必須である歯科麻酔学の知識を修得する。以上が到達目標である。講義はこの目標に沿って行われた。

2) 自己点検・評価

試験や実習の成績や、学生からの評価から、上記目標は十分に達成できたと考える。本年度は、移行期であり、講師として、安部将太、佐藤光、吉田健司も講義に参加しており、いずれも板書を基本とした。一部、スライドで講義をしてプリントで渡してほしいという要望があった。

3) 改善方策

現在の目標は達成できているが、歯科麻酔学の国家試験問題は、徐々に問題数も増加し、範囲も広がってきている。今後も継続的に、高い目標を設定し、それに教育が追従できるように、教育体制を充実させていきたい。スライドで講義をしてプリントで渡してほしいという要望については、後で見れば良く、寝る学生を増やすので、変える必要はない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

完成資料を配ると学生は講義を聴かなくなる傾向がある。また、スライドをこちらのペースで進めると、学生は講義に追従できなくなり、暗くて寝る者が多くなる。そのため、配るプリントはあえて完成度の低くし、プリントには板書を記入するスペースを設けた。講義のメインは板書とした。

2) 自己点検・評価

学生からの評価は、「分かりやすい」、などの回答が得られた。各点数も平均以上を上回っていた。配布したプリントのスペースを上手く使って、綺麗にノートを取ってくれる学生が多く、その点でも効果があったと考える。また、それが歯科麻酔学の定期試験やCBTに反映されたと考える。

3) 改善方策

現在の講義体系を大きく変えるつもりはない。現在の講義がより学生にわかりやすい、親しみやすい、自然と覚えやすい内容になるように、要所要所で工夫を加えたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

本年度は、前期も、後期も〇×式の客観試験（マークシート使用）に加え、5枝択一の問題および筆記試験とした。前期も後期も中間試験を設けたため追再試験を含めて8回の試験で最終成績が判定され、正確な成績評価ができたと思われる。

2) 自己点検・評価

85名中7名が退学/休学となり、78名が定期試験を受験した。最終評価の平均点は78.9点で、最終評価で不合格となった者はいなかった。授業内容をわかりやすく、充実させたための結果だと考え、成果がみられたと考える。

3) 改善方策

従来まで行ってきた客観試験のみでは十分な評価ができなかった部分があるため、筆記試験を導入して理解を深めることができたと思われる。時間的にも余裕がみられたので、本年度も記述問題も追加し、従来通り中間試験も加えて、学習効果を高めたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科矯正学 福井 和徳	第4学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

矯正歯科治療に係わる総論、診断学、治療学について理解するため、10項目の到達目標を掲げて、通年にわたり教授した。前期は成長発育、正常咬合と不正咬合の基礎を重点に講義した。後期は治療ステップをメインに 総合診断、治療計画立案までの一連の流れからスタートし、抜歯の必要性を説明した。その後、動的治療内容に関する固定の概念、装置の特徴、治療による偶発症、保定と共に再発防止策の講義を実施した。

2) 自己点検・評価

初回の歯科矯正学歴史についての教授方法が自身の臨床経験を踏まえての説明に時間配分をかけすぎていた。診断学、特にに関する理科力が達成しにくい評価が目立った。また宿題が多いとの指摘もあった。

3) 改善方策

講義内容をよりシンプルにし、模型分析やセファロ分析の演習を多く行う。教授法を改善し、簡潔明瞭にわかりやすく講義する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

授業形式は教科書を中心に板書・スライドにて講義を行った。授業毎に 講義の最後に関連している範囲の国家試験の平易な問題をピックアップし、確認試験を行った。ツイードの計算問題やセファロの計測については復習形式で宿題を課した。

2) 自己点検・評価

セファロ分析については、理解力が得られづらいようであった。 しながら医療面接そして検査から診断までのステップの中で、なぜセファロや模型分析が必要かが理解できていない。

3) 改善方策

総合診断の流れを理解させるため、実際の患者でミニ総合診断を行わせる。セファロに関しては、実習とリンクさせ、レポート形式で自学自習させてから、実習時に口頭試問を行い理解を深めさせる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期・後期の定期試験で評価する。セファロに関しては中間試験として分析能力を評価した。

2) 自己点検・評価

後期の授業回数が多いため、中間試験を実施したため勉強がしやすい評価が得られた。マークシート方式で全て実施したが後期定期試験では範囲が広く、難易度が高いとの意見があった。

3) 改善方策

後期定期試験の問題配分を調整する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科矯正学実習 福井 和徳	第4学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科矯正学に関する基本的な技能と治療能力を身に付けさせる。特に歯が移動するための原理を理解するために、舌側孤線装置およびマルチブラケット装置の2種類で歯の移動シュミレートを行わせ、学習する。

2) 自己点検・評価

全員が歯の移動シュミレートを実施し、タイポドント模型上で矯正力が発現するメカニズムや歯の移動様式を理解できることが達成された。しかし、インストラクターの指導内容に差があり、班ごとの進行状況に差が生じ、実習スケジュールに影響があった。

3) 改善方策

進行状況を毎週実施している実習会議でインストラクターから報告させ、遅延の原因を検討し、指導内容についてキャリブレーションを速やかに図る。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習前に示説を行い、基本手技後に2種類の装置製作に入る。各班毎にインストラクターをおき、ステップ毎に確認を得ながら進行する。レポート、口頭試問をインストラクターが行う。

2) 自己点検・評価

実習の進行が早い、インストラクターの指導と進行状況に差があるなどの指摘があった。

3) 改善方策

実習会議でインストラクターから指導内容を報告させ、問題あれば修正を速やかに図る。実習会議に欠席したインストラクターへの伝達を密に行う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

製作した装置、小試験、総合試験（実技・筆記）、出席状況で評価する。

2) 自己点検・評価

レポートなどの課題が多く、小試験の勉強が間に合わないなどの評価があった。出席状況は昨年に比較して向上した。

3) 改善方策

レポート内容と小試験出題範囲を合わせる。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	小児歯科学 島村 和宏	第4学年
--------------------	----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

小児の口腔の健康維持、歯列・咬合の育成をはかるために、成長発育（心身の発育・発達）について学び、小児の口腔発育・発達および種々の口腔疾患を理解して、その診断と治療法についての知識を習得する。大きな変更の必要性は感じていない。

2) 自己点検・評価

前年度と異なり前期のみの集中カリキュラムとなったため、学生には毎回の講義でのポイントを細かく示した。CBT・OSCE・臨床実習試験・国家試験に向けて個々の目標設定の重要性と自主努力、ルール順守を指導した。公平公正に心掛けて指導し、一部学生には厳しいと捉えられているようだが、シラバス通りの講義スタイルや試験内容などに大きな問題はないと考えている。平均点は昨年度より若干上昇した。

3) 改善方策

関連教科の担当者からの意見も参考に講義してきた。他大学の状況も情報収集する。他大の教員と共同で作成した教科書も改編したため事前資料の見直しを図る。基礎科目に関連した項目も多く、虐待など近年の社会状況の知識も必要のため、そうした話題の解説も増やし、あらためて自主的準備の必要性を伝達する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各講義最初に重要ポイントを指摘し、該当する教科書記載場所を確認しながら講義した。CBTを見据えて画像を活用し、重要項目を記したプリントを配布した。特に重要な点はあらためて板書し図を描きながら学生自身にも確認させて授業を進めた。視覚素材として関係する症例、マネキン、顎模型等を提示し説明を加えた。

2) 自己点検・評価

当日の授業項目・内容を板書し当日の授業目標を明確にした。常にCBTと国試問題を意識して講義を進めたことで、動機付けに繋がっていると感じている。視覚資料の改変を勧め、理解を深めさせた。厳しいとの意見もあったが「わかりやすい。丁寧」との評価もあり概ね理解を得られた。

3) 改善方策

基礎的問題への理解不足には、関連事項が出て来た際にこれからも繰り返し説明する。その際に関連他科の事例も取り入れる。事前準備と重要事項（ポイント）の指摘をさらに充実させ、よりわかりやすい講義を目標に配慮する。視覚資料等の点検充実を計る。実習時間の指導との関連強化。板書の量を減らし、講義に集中させたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

前期に集中し1つため1回の定期試験により評価した。成績が十分でなかった者については、再試験を行ったその結果をシラバスに記載の評価基準に則って判定した。

2) 自己点検・評価

前期定期試験の結果、合格点未満の学生に再試験を実施した。定期試験の内容は全講義項目の内容を網羅した出題となっており、学生の理解・習得度の評価には適切であった。試験前には重要項目を確認させているが、本試で合格基準に満たなかった者もあり、さらに理解度を高めさせたい。平均点や最高点は昨年度以上であった。

3) 改善方策

生理的特徴や解剖学的特徴など前期の基礎的項目が苦手なものが多かった。興味をひきやすい臨床的内容に関連づけて講義しているが、重要項目の理解を目標に画像を増やし講義内容の充実を計る。次年度は再度カリキュラム変更があるため試験問題も再考する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	小児歯科学実習 島村 和宏	第4学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

小児の口腔疾患の診断、処置ならびに口腔健康維持管理を遂行するために、小児のう蝕治療・咬合誘導処置・予防的処置の各項目の理論（知識）と技能、態度を習得する。実習では成長発育過程にある小児の歯科診療（治療）の特徴をよく理解することも重要となる。なおこれらは「モデル・コア・カリキュラム」に沿った内容を基本として実習を進める。

2) 自己点検・評価

共用試験OSCEの課題はなくなったが、臨床実習も見据えて「モデル・コア・カリキュラム」に準拠し、実習計画を立てて実践した。実習と演習が補完的役割も果たすため、復習がてら小テストを実施したが成績不良者は固定されていく。デモや視覚素材も利用したが留年者や編入者のなかに見ていない者がいたようで残念である。

3) 改善方策

OSCE公的化に伴い育成系課題が一旦なくなったが、今後復活の可能性があるため臨床実習も見据えて時間配分を調整して対応する。実習が苦手な者もいるため、時間に余裕ができる者もいるが、ある程度余裕を持った配分とする。実習時間の中で円滑・効果的に進められるような実習を目指す。講義と連動したレポート提出、小テストを継続する。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実習内容に沿った教室独自のサブテキスト2023小児歯科学実習を作成し全員に配布した。また全実習項目で実習開始時に視覚素材<ビデオ>による説明・解説後、各グループごとにデモンストレーションを行った。講義と連動したレポート提出、試問を行った。学生評価は高かった。

2) 自己点検・評価

各グループ担当教員が学生の質問・疑問点に積極的に対応したが、欠席する者もあり全体のスケジュール進行と各自の進捗状況のバランスが難しかった。実習開始時に当日の実習内容に関する小テストを実施。各ステップごとに処置・製作物の段階的評価を行い学生にフィードバックしている。指導者の統一に関する意見があった。

3) 改善方策

OSCE課題から外れたが基本的実習形態・方法・内容は前年度を踏襲する。時間配分の見直しや、指導教員の態度含め一層の指導力向上を図り、非常勤講師とも連携し対応力を強化する。実習指導内容の標準化・統一化に努める。一定の検印待ち時間は必要なため、指示した学習項目の予習復習を徹底させる。科目間での指導基準について願う。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

各実習項目ごとに実習内容および製作物の評価、ならびに実習試験（筆記試験・課題試験）を実施し、これらを総合して実習の評価を行った。

2) 自己点検・評価

シラバスの記載通りに評価した。学生の知識・技能・態度を総合的、客観的に評価している。実習日に不在の者への対応に苦慮した。適宜試験や追加口頭試問も実施し、知識の定着に努めたが、成績の低い学生には多少の重荷となったのはやむを得ないと思う。

3) 改善方策

従来通り、実習内容に即した各実習項目・課題・実習試験を総合して評価する。臨床的手技に精通した非常勤講師力のもと、医局員と共に指導体制を強化する。学生には負担もあるが、口頭試問やレポートは継続する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	歯科放射線学Ⅱ 原田 卓哉	第4学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバス記載内容通りに実施できていると理解している。

2) 自己点検・評価

長所：説明がわかりやすい。
問題点：解説の時間が少ないときがある。

3) 改善方策

長所を伸長するための方策：わかりやすい説明をする。
問題点を解決していくための方策：解説の時間を多くする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

板書およびスライドを利用している。プリントを配布して、授業内容をまとめるように指導している。

2) 自己点検・評価

スライドを作れ、レジュメを作れ、CBT対策、国家試験対策をといろいろ言われてもすべてを実行するのは難しい。

3) 改善方策

スライドとレジュメの作成を少しずつ進めていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

多肢選択式の筆記試験とした定期試験で評価している。

2) 自己点検・評価

点数評価のため客観性があると考ええる。
特に問題はない。

3) 改善方策

特に問題はない。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	高齢者歯科学Ⅱ 鈴木 史彦	第4学年
--------------------	------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者歯科学Ⅱでは摂食嚥下リハビリテーションに関する知識を習得することを目的としている。主な到達目標は、摂食嚥下に関する解剖と生理、摂食嚥下のモデル、原因疾患と合併症、摂食嚥下障害の評価とリハビリテーションの方法、嚥下補助床、栄養管理について学習する。

2) 自己点検・評価

シラバスの内容に沿って授業を実施した。長所は授業の開始時に「今回の重要3項目」を提示することで、その回で学習すべき内容のコアとなる部部を明確にしたことである。問題点は、項目によっては内容が多い点である。

3) 改善方策

現在の授業方式はかなり確立されたものと考えている。重要3項目が適切なものであるかどうか、過去5年間の歯科医師国家試験出題基準と乖離した内容になっていないかを確認しながら、必要に応じてブラッシュアップをしていく所存である。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

前回の授業の復習をするために、最初にGoogleフォームを用いた確認テストをしている。結果がすぐにグラフで反映されるため、授業内容に対する学生の理解度の確認にもなる。授業は使用している教科書をもとに、内容をまとめた講義資料とスライドを用いて実施している。また、その回と関連する歯科医師国家試験の過去問題を練習問題として解き方を解説している。

2) 自己点検・評価

講義資料は単にパワーポイントのスライド一覧ではなく、ワードファイルにしたものを別途準備し、字が読める資料を心がけている。Googleフォームでの確認テストにより、リアルタイムで作成される正答率グラフをもとに解説することで、双方向性も確保している。スライドには適宜動画を挿入することで、わかりやすいように工夫している。内容が多い場合に、授業の後半で説明が不足することが問題点である。

3) 改善方策

1回の講義で内容が多いものに関しては、内容を2回に分けて実施するような見直しが必要と考えている。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期試験と追・再試験により100点満点で評価している。80点は筆記問題で、授業で提示した重要3項目に関する問題を出題している。20点は選択肢問題で、授業で提示した歯科医師国家試験の過去問題を改変した問題を出題している。筆記試験と選択肢試験の合計が65点以上の者が合格となる。なお、小テストの解答は5点満点に換算し、試験成績に上限100点で加点している。

2) 自己点検・評価

定期試験と追・再試験の終了後に正答を配布し、その場で学生からの疑義を受け付けている。また、定期試験と追・再試験は異なる範囲から出題することで、追試と再試の受験者に対する公正性を担保している。

3) 改善方策

採点開始前に学生からの疑義を受け付けることにより、模範解答に提示した以外の解答をどのように処理するかについて、客観性を担保している。今後もこの形式を継続し、適切な成績評価を継続していきたい。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	障害者歯科学 吉田 健司	第4学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

障害者の法律から始まり、各々の症候群や病態について授業を行った。障害に重点を絞った授業を行い、また、口腔内状況やそれぞれにあった行動調整について授業を行った。

2) 自己点検・評価

生理学や生化学の箇所は授業時間も少ないため、復習箇所を話す程度だった。今年は前年までの反省を活かし、授業開始時に、前回の復習として問題を解かせた。

3) 改善方策

低学年で学ぶ生理学や生化学の知識が必要であり、授業に取り入れるたが、時間の関係上あまりできなかったため、関係するプリントを作成し、配布する必要があると感じた。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

スライドを用いて説明し、プリントは穴埋め形式を用いて重要な個所を書いて覚えるように授業を行った。

2) 自己点検・評価

初めに穴埋めをさせ、その後説明を行ったが、生徒によってはスピードが追いつかないとの声もあったので、しっかり時間をとる必要があると感じた。

3) 改善方策

スライドの穴埋め形式では止まっていたが、それでももっと時間がほしいとの声があったので、書き込む量を減らし、聞き逃しがないように配慮する必要があると感じた。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

定期テスト100点満点で評価し、65点未満を追試験対象者とした。追試者は1名おり、最終評価では全員合格となった。

2) 自己点検・評価

定期テストでは100点の学生はいなかった。しかし、問題によっては100%正解率の問題もあり改善する必要があると感じた。

3) 改善方策

引き続き、定期テストとCBT問題をリンクさせながら、問題の作成を行っていく必要がある。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	臨床総合演習 川原 一郎	第4学年
--------------------	-----------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床歯科学においては、知識のみならず技能と態度の学習が要求される。次年度に履修する臨床実習では、これまでに学習してきた知識と技能をさらに発展させて、実際の臨床に即した診療参加型の実習を行うことになる。本科目では講義・模型実習で学習した事項と診療参加型臨床実習を段階的に結びつけ、臨床実習へ円滑に移行するための内容を学習する。

2) 自己点検・評価

試験結果や臨床実習前OSCEの結果から判断すると、到達目標は達成できたと考える。

3) 改善方策

改善なしで問題ないと考える。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

学年を8～10名ずつのグループに分け学習を行う。グループ毎にローテーションして課題を実施する。

2) 自己点検・評価

今年度は、年度途中でCBT対策の一環で、留年生・編入生を科目選択ゼミナール受講させる事になった。そのため、臨床総合演習のカリキュラムを変更することになり、教員学生に混乱を招いた。しかし、なるべく学生に不利益にならないようにカリキュラムを修正できたと思う。

3) 改善方策

次年度は、今年度のように年度途中でのカリキュラムの変更がないようにしていきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

後期の演習の最終5日間で実技試験を実施した。実技試験の成績を90%、出席率を10%とした。

2) 自己点検・評価

上記評価で3名を不合格とした。その後、不合格者3名に課題レポートを提出させて全員合格とした。

3) 改善方策

今後も同様の評価方法で成績評価を行うので問題ないと考える。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	総合演習 4D 板橋 仁	第 4 学年
--------------------	-----------------	--------

調査実施年月：2025年 3 月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

「生命科学教育科目を中心とした歯科医学的知識を復習して理解を深める」を一般目標として、1) 生命科学教育科目について理解する。2) 学年末のCBTに合格できる総合力を身につける。を到達目標に掲げ、各担当科目で分担し講義を行なっている。

2) 自己点検・評価

「復習ができてよかった」という意見の一方で、「4D試験のためなのか、CBT対策なのか分からない」という意見があった。

3) 改善方策

4Dは基礎系科目のみで、CBTは基礎・臨床の両方が含まれ、どちらも進級には不可欠である。4DとCBTはそれぞれ独立した判定基準であるので、「CBTのため」を明記しなくとも良いかもしれない。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

「臨床実習開始前までに必要不可欠な総合的知識を身につけるために生命科学教育科目を中心に歯科医学的知識の理解を深め、CBTに合格できる総合力を身につける」として、基礎系科目に対してコマ割りして講義を行なった。

2) 自己点検・評価

担当教員に対する賞賛の声がある一方で、「臨床系がメインで出るのに、臨床系の授業が何もない。4D初めてなのに、どう対応しているのかわからない。」あるいは「もっと4D、CBTに直結する内容にしてほしい」との意見が寄せられた。

3) 改善方策

今後は科目責任者を学年主任として、科目の位置付けを再設定していただきたい。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

4Dとして総合試験を行い合否判定する。定期試験及び追再試験（100%）により評価し、65点以上で合格とする。

2) 自己点検・評価

4Dのみの単科留年はないと思われるが、評価基準を統一し厳正に行うことを継続する。

3) 改善方策

出題された問題が削除問題とならないよう、さらに精度を上げることを継続する。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	臨床実習 川鍋 仁	第5学年
--------------------	--------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標に十分に達している。しかし近年の国家試験問題が臨床実習を重視したような内容が出題される傾向にあるため、学生にも意識させて臨床実習を遂行する必要がある。

2) 自己点検・評価

臨床実習開始時のオリエンテーションにおいて、シラバスと臨床実習必携を配布後に各科目の担当者から概略が説明される。したがって、長所は自ら確認をしなくても到達目標が説明されることであり、問題点は科目によって到達目標の説明内容にばらつきがある点である。また、学生主導で行うCPXなど積極的に行うように指導できたのはよかった。一方で、もう少し基本的な知識を整理させる実習も必要である。

3) 改善方策

到達目標に関する説明が不足だと学生が感じる場合には、それぞれの科目をローテーションする際に、自ら臨床実習必携を読んで確認しておくように朝礼にてアナウンスを行う。また、担当教官に対してもプレクリ時に到達目標の説明を再度行うよう、臨床実習実務者委員会を通してアナウンスをすることで、臨床実習の目標をより明確にできるものとする。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

各科目で必須ケースを設定することにより、診療参加型臨床実習中に、必要な自験症例を満たせるように教育している。また、症例に対する理解を深めるために、必要に応じてPBLやレポート等による知識教育が併用されている。臨床実習の進捗状況については、2週に1回開催される臨床実習実務者委員会と、1月ごとに開催される臨床実習委員会で確認することで、必須ケースが不足する学生が出ないように配慮している。

2) 自己点検・評価

学生からは、予習と復習の実施、教員からの重要項目の説明、教員への質問については、一定の評価が得られている。臨床実習実務者委員会で、科目の担当教員とクラス担任と一緒に情報共有をすることで、円滑な臨床実習を実施できていることが長所であるとする。一方で、学生からは一部教員からのパワハラ行為に対する不満も挙げられていることが問題点である。

3) 改善方策

ハラスメントに関して問題が挙げられた教員については、歯学部長、学生部長、学年主任、カウンセラーと話し合う場を設けたり、一定期間学生教育から離れてもらったりといった対応をした。しかし、すべてのハラスメント行為に対して十分な対応ができていないと思われることから、ハラスメント委員会と連携をとったり、学生が日常的に相談しやすい環境づくりをする等の改善が必要であるとする。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

成績評価はI～IV期までの終了試験による知識評価、必須ケースを含む技能評価、出席率と身だしなみによる態度評価をコアとしている。具体的には、知識点の平均が65点以上であること、必須ケースをすべて満たしていること、知識・技能・態度を100点満点に換算して、合計65点以上であることが進級要件となる。加えて、CPX、CSX、および総合試験5Dに合格することが進級要件となる。

2) 自己点検・評価

評価の進捗状況は第I期から第IV期の終了試験実施後に、各科から知識点・技能点・態度点を提出してもらい、全学生の進捗状況を確認した。クラス担任から担当学生にその内容をフィードバックしてもらおうとともに、不足ケースに関しては各科で対応してもらった。

3) 改善方策

各期での学生の進捗状況を把握することにより、適切に対応をしている点については継続的に実施していく。技能点の必須ケースから知識に関する項目を削除すべく臨床実習に関する各委員会です承を得て、2023年度は改善されることとなった。現状では知識点の評価が終了試験のみであることから、PBL、口頭試験、レポート等に関しては知識点に組み込めるように検討中である。

2024年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年 (記載者)	臨床総合講義 (歯科麻酔学) 山崎 信也	第 学年
--------------------	-------------------------	------

調査実施年月：2025年3月

I 到達目標

1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験に合格するために、という一般目標に沿ってカリキュラムが組まれた。

2) 自己点検・評価

第6学年は67名でスタートし、休学者3名で、最終的に、国家試験出願は64名であった。3回の卒業試験で平均72%以上が合格と判定され、卒業試験の合格基準に達した46名(70%)が国家試験を受験した。昨年の卒業試験合格率より3%程度多い。現役の国家試験合格者は32名(69.6%)で、昨年より9.6%高かった。私立平均が82.1%であることを考えると、12.5%足りない。

3) 改善方策

現在のカリキュラムは良い部分も多く、安定してきているので、このカリキュラムを更に改良し安定させ、改良すべき点は改良し、充実させていきたい。

II 教育方法

1) 教育方法の現状説明

実力試験で成績不良の学生は、7限目にzoomでのフィードバック講義を義務付けた。

2) 自己点検・評価

上記の方策は有効であったと思われたが、来年度は、実力試験は卒業試験へと変更を予定している。

3) 改善方策

コロナ関係での欠席は公欠扱いににされるということから、全体として、曖昧な欠席が多くなった可能性がある。来年度は、体調不良時に関する何らかの取り決めが必要と思われる。

III 成績評価

1) 成績評価の現状説明

3回の卒業試験の平均が72点以上を合格とした。

2) 自己点検・評価

卒業試験の判定基準が3回の平均で72%になったが、それほど卒業試験の合格率は低下せず、むしろ昨年より3%上昇した。柴田先生のFD講義で、卒業試験でストライク問題を求めたが、問題の難易度が下がった可能性もある。

3) 改善方策

全科目で必修問題の質も上げなければならないが、基本的事項を問う問題としても、問題を簡単にするのではなく切り口などを変えていく必要がある。